

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和四年十一月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十一卷 第八号（通巻二四八号）

万象

B A N S Y O

十一月号

2022. 11



十一月の句

しほさゐの優しき日なり椿垣

大坪景章

第二句集『椿垣』の題名になっている句である。

椿は、常緑樹で、大きく育ち、風に強いので、海岸沿いに植えられることが多い。いつも、海からの強い風を受けている椿の垣根であるが、今日は、おだやかな日である。波音も優しく、垣根に咲いた椿の花も一層美しく、人々の心をなごませてくれる。

椿の花は表面だけの美しさではなく、力強く我々の生活を守ってくれる「自然からの賜り物である。」と（あとがき）にも書かれているように、先生は、椿の花を通して、自然からの恩恵を深く感じ、それを俳句に詠まれた。

（福島吉美）

令和四年

十一月号

万象

BANSYO

わが背子と二人見ませばいくばくか
この降る雪の嬉しからまし

「万葉集 第八卷」光明皇后

万 象

令和4年11月号

名誉主宰作品 青 柿

内海 良太 4

主宰作品 草の露

江見 悦子 5

風音集Ⅰ・Ⅱ

小林 愛子

中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・曾根 満

松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子

榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

6

風音散歩⑤（十一月号）

小林 愛子 10

万象の窓⑧ 富士山あれこれⅠ

江見 悦子 11

同人作品

内海良太選

12

同人作品の佳句

内海 良太 32

同人会だより

第5回「中山純子記念俳句賞」作品募集

沢辺たけし 34

「万象」オンライン同人句会の報告

同人 会 34

令和4年「万象」新同人発表

万象俳句会 35

同人特別作品

成田祇園祭

奥 太雅 40

虹 二 重

加山ひさ子 41

特別作品評（九月号）

亀田やす子 42

同人作品鑑賞（九月号）・・・・・・・・・・・・・小川 明美 43

風のしをり⑧ 雪の日に 細見綾子・・・・・・・・・・・・・江見 悦子 44

万葉の抒情③・・・・・・・・・・・・・橋本 清 45

万象ノオト「路地」・・・・・・・・中村 優・大長文昭・藤原善明・齊藤孝夫・宮田千恵子・廣田宏美 46

巻頭作家（十月号）プロフィール 小池清晴（東京）・・・・・・・・・・・・・広瀬 俊雄 48

万象作品

江見悦子選・・・・・・・・・・・・・49

俳句カレンダー掲載句鑑賞 胸に吊る泥のクルスや蓮根掘る 石田野武男 倉谷ます美 61

珈琲ぶれいく③〇・・・・・・・・・・・・・61

万象作品の佳句・・・・・・・・・・・・・江見 悦子 62

北から南から 中山純子先生を偲ぶ あかね・白菊句会（石川）・・・・・・・・中條 睦子 64

東西南北・・・・・・・・・・・・・66

令和四年 全国俳句大会 作品集・・・・・・・・・・・・・〈1〉〈34〉

青 柿

内 海 良 太

(名替主幸)

青 柿 の ひ か り 溢 る る 祝 の 家
落 し 水 棚 田 の 傾 斜 喜 べ り
威 銃 は た と 案 山 子 の 倒 れ た る
天 の 川 決 壊 し た る 越 の 国
乱 世 の ひ ま は り 迷 路 出 口 な し
ひ ま は り に ざ わ ざ わ の 風 吹 け り
逆 上 が り 青 き 秋 天 目 に あ ふ れ

草の露

江見悦子

(主幸)

山巔に月を仰ぎて逝かれしか

山田春生先生を悼んで

丈揃ふもろこし畑や裸富士

火祭の火屑飛び散る富士の闇

御師の家へたどる灯や草の露

蓮の実の粒立つうてなうすみどり

沫雪のごと冬瓜のわたくづる

捨てられぬ本積み上がる子規忌かな

法師蟬

小林 愛子

(名譽顧問)

月 渡り常盤木落葉とめどなし
花 あげてへくそかづらの可憐とも
背 のぬめりこそげて処暑の舌平目
独 居てふぜいたく終り法師蟬
植 木屋の鋸で払へる秋の蜂
長 靴に蜂のむくろや野分あと

法師 蟬

中村 千久

(編集人)

序破急の急のあやふや法師蟬
さ迷へる迷路クリスティーの夜長
デッサンの石膏像に風の色
おほらかな女陰はとの土偶や秋うらら
茶屋街の路地にあふるや虫の声
真夜に聞く風の鞭打つ野分かな

ヒロシマ忌

福島 せいぎ

(顧問)

ヒロシマ忌心ゆくまで鐘を撞く
夕立のにはかに土の匂ひけり
母の乳離さぬ弟終戦日
大賀蓮咲けり笑ひ地藏の寺
流灯の驟雨に打たれつつ流る
毒の実を啄み鳴くや磯鷄

泣き相撲

柳澤 宗正

(顧問)

縁日の戻る賑はひかき氷
ほのかなる稲穂の匂ひマスク取る
店頭の古書棚のぞく秋の昼
響き合ふ松毬のあを空の青
代官江川邸の駕籠吊る土間やちちろ鳴く
神前を賑はす赤子泣き相撲

鷹 柱

曾根 満

(同人会会長)

秋うららロープウェイに婚の衆
雲を抜け雲に入りたる鷹柱
朝よりの雨にほぐるる芒かな
銀杏の池打つ慶喜隠棲地
稲を干す小学校の垣を借り
吊橋の先の白きは蕎麦の花

白

露

松原智津子

(北海道)

葉隠れの葛の花の香行きずりに
秋灯や灯火管制知る齡
言ひたきこと言はずに待つや流れ星
風木舎偲ぶ綾子忌近づけば
石橋の擬宝珠曇る白露かな

小さき命

亀田やす子

(栃木)

秋霖や胸に抱ふる返却本
秋めくや月の軸掛け麻問屋
秋薔薇の小さき命炎めく
鰯雲海の向かうの大戦
琥珀色の満月昇る重たさう

朝の露

沢辺たけし

(千葉)

足許の烏柄杓に風くるん
破れたるばい握りしめ夜店の子
羽音去る梅檀の実に入日かな
蜘蛛の罫の曼荼羅となる朝の露
泳ぎゐる蛸のめりはり涼新た

花ジンジャー

吉中愛子

(東京)

吹かれゐし草草に名や敗戦忌
いとど跳ぶ炉辺に釜師の長き黙
風向きの時に北より栗を剝く
花ジンジャー抱へしまさに切手貼る
てのひらに松露を受くる雁の頃

小鳥来る

榎本文代

(神奈川)

盆の月狸が庭を通りけり
首に巻くタオルの湿り敗戦日
ほろほろと干菓子こぼるる秋暑かな
遠山を行く雲迅し葛の花
小鳥来るパン跳ね上がるトースター

綾子の忌

神田美穂子

(静岡)

ぶつかけに七味二匙暑に耐ふる
朝顔に夜勤帰りのバイク停め
秋暑しファスナーの噛む小銭入れ
秋澄むや遠く近くに山幾重
黒豆に色差し初むる綾子の忌

尾越の鴨

井村和子

(石川)

音たてて分厚き封書厄日かな
正座して遺影に供ふ菊の酒
新豆腐ステーキにして一人の夜
通りやんせの細道抜けて七五三
医王嶺を尾越の鴨や朝の風

風吹く日

前田貴美子

(沖縄)

長身岸本尚毅さんの俳人秋風を来り

石垣に猫の背のびや種糸瓜
福木実落つ昔のやうな風吹く日
苦瓜の種が真つ赤よ海の騒ど
秋夕焼充血の眼に異常なし

風音散歩

⑤ (十一月号)

小林 愛子

秋霖や胸に抱ふる返却本 亀田やす子

九、十月ごろ、曇りがちで小雨が降るような日がつづく。

梅雨のように降り続くことが多いので、秋霖とも秋微雨ともいう。山本健吉によれば「秋の雨は、秋季の雨の総称であり、そのうち秋雨はとくに秋霖をさす語と見てよからう」と。

掲句は、借りた本を返しに行くところ。「胸に抱ふる」とあるのは、深く心を揺さぶった内容であつたに違いない。ほとぼりを胸底に沈めたまま、それでも返却しなければと、少し思いつめた様子も垣間見られる。一步踏み出した街中は雨に濡れ、作者の心情が蕭条とした趣を更に深めている。

破れたるばい握りしめ夜店の子 沢辺たけし

夏の夜、縁日などで路端に露店が並び、食べ物、玩具、古本、衣類、金魚釣り、植木など様々なものが売られる。子供同士や家族連れで見たり遊んだりと楽しい風物である。

「破れたるばい」とあるのは、水槽の前で金魚を掬う杓子の和紙が破れて、子供が茫然と杓子を握って立っているのである。さあ一大事、握りしめている子がかわいい。ところで季語は「箱釣」でも成り立つ。「箱釣で」破れたばいを強調するか、「夜店の子」で子どもに焦点を当てるか。感動した

ものによって決まるが、それを決めるのは感覚である。

首に巻くタオルの湿り敗戦日 榎本文代

八月十五日、日本はポツダム宣言を受諾、無条件降伏をした日であることは言うまでもない。主季語は、終戦記念日で、他に敗戦忌、敗戦の日、終戦の日、八月十五日があり、忌日としたのは「俳人の志」と歳時記にある。

作者は戦後生まれなので敗戦のどさくさは経験していない。しかし語り継がれたことによって、これを重く受け止めていたと思われる。この日は、首のタオルで汗を拭きながら家事に励んでいたであろう。あの日も抜けるような青空と猛暑であった。「タオルの湿り」という身体的感覚が、見ていない記憶を呼び覚ましたのである。

長身の俳人秋風を来り 前田貴美子

「岸本尚毅さん」の前書きがある。岸本氏のことは総合誌からお姿と俳句を拝見、いま最も活躍中の俳人のお一人と拝察している。その氏が沖繩にやって来た。

「秋風を来り」とは、内地から秋風を連れてやって来たとも、秋風の吹き始めた沖繩に現れたともとられる。その曖昧さが句の幅を広げており、韻文の醍醐味でもある。「秋の風」と言っても季語の本意は一樣ではないが、句から受ける印象は「秋の初風」であろうか。それは「長身の」の措辞からきている。一句の中の二つの概念、「長身」と「秋風」の対置が爽やかであることから推察されるのである。

富士山あれこれ I

江 見 悦 子

この夏、富士五湖の一つ河口湖畔のホテルから「赤富士」を見ることが出来ました。「赤富士」と言えば勿論、葛飾北斎が「富嶽三十六景」の中で「凱風快晴」と題した風景版画です。

「赤富士」は季語でもあり、『角川俳句大歳時記』によると、「夏の裏富士が朝日で真つ赤に染まる現象。晩夏初秋（7、8月）、雲や霧によって曙光が分光されて起こる」とあります。「裏富士」とは山梨県側から見る富士山のこと、私はまさに夜明けの「赤富士」に出会えたのでした。

日本地図センターの研究によると、全国で富士山が見える場所は、驚くべきことに、北は福島県、南は和歌山県で、どちらも富士山から300キロも離れています。

富士五湖からの裏富士、静岡県三保松原からの表富士の優美な姿は、日本を象徴する山としてふさわしいですね。「万象」のお仲間にも、ご自宅から毎日富士山を眺めることのできる神田美穂子さんのような方がいらつしやり、羨ましい限りです。

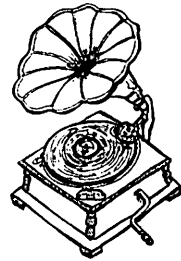
かつての富士山は神仏の住む霊山とされ、信仰のために登る山でした。平安末期には修験者が修行のために登っていたのが室町以降は一般に広がり、江戸後半になると庶民による参詣登山が大流行しました。多額の旅の費用を用意するために地域や仕事仲間でお金を積み立て、くじに当たった代表者が富士山に登る団体を作りました。いわゆる「富士講」です。

色々と調べていく内に、「富士講」の人々を受け入れた上吉田（富士吉田市）をぜひとも訪ね、三年ぶりに開かれる「吉田の火祭」（毎年8月26日夜）を見てみようと思ひ立ちました。

上吉田は御師の町でした。富士山の御師とは、富士山の神霊と富士講などの信者の間に立つて祈りをあげ、自宅を宿坊（御師坊）として提供し登山の世話をした宗教者のことです。最盛期の上吉田には86軒もの御師の家があり、町並は今も当時の面影を残しています。

さて、「上吉田一人吟行」については、次号でお話したいと思います。

同人作品



内海良太選

○は佳句に選ばれました。

札幌 岡本敬子

いたどりの白花の香の秋めける
釣舟草の葉はすこし生乾き
蒲の穂やシスター神父の墓所開か
灯籠の小さきにかすか虫の声
水車築に揚がりし鮭を見て無口

札幌 落合裕子

夏の川魚道に鷗動かざる
黒鵜コタンの森にこだませり
○突風に走る網戸の右ひだり
風鈴の音色いろいろ陶芸展
疫病の大波小波藤は実に

札幌 濱谷和代

紅白帽目深に子らの水合戦
在りし日のままの藤椅子青畳
散骨の風死す海へ別れかな
初盆や微笑む父母と夢で逢ふ
潮騒の高なる海辺実はまなす

札幌 大内和憲

新義齒に昭和の技や秋簾

深傷の演技で果つる水鉄砲
手捻りの壺を花器とし野紺菊
彩雲に蹄涼しき日高駒
引き絞る弓矢の先の虫の闇

札幌 紅露恵子

京扇子開いて閉ぢて母卒寿
夏帽子ベリ―畑の小道より
茄子の花落ちて葉脈色を増し
けぶりたる地平のサイロ大白雨
甚平に白竜の柄星明り

札幌 大内マキ子

はまなすの雨を溜めたる捨小舟
干し昆布布のごとくにたたみ折り
野仏のみな暑に耐へてゐるまぶた
竿立てて釣人をらず夏柳
迎火の焚きたるあとの一つ星

札幌 中鉢弘一

無住寺に鷗一羽の浜の夏
河鳥朝霧明けし溪流に
アカシアのひと葉ひと葉に露乗せて

雲の端も染めて黄丹秋夕焼
啄木の歌碑に傾るるこぼれ萩

札幌 北浦詩子

すれ違ふ舞妓のにはひ月見草
大夕焼濃ければ口をつぐみたり
傾ぎつつ回す佞武多のやぶ睨み
玉砂利に残る湿りや涼新た
明かり無き空き家の庭に虫の声

江別 佐藤哲

まつり唄遠くに聞きてにぎにぎし
過疎すすむ集落なれど幟立つ
累々と牧草ロール秋深し
鮭の首残されてをりけもの道
三千人に足らぬ街なり大花火

苫小牧 林陽子

蓮の葉を風ひるがへしひるがへし
抽んでて風を集むる蓮の花
たつぷりと庭木に水を原爆忌
昼寝覚百寿の母の幼顔
知床の海は群青滝落つる

新潟 高橋 ひろ

盆の夜や賄方の横坐り
終戦の十日早くば広島忌
家裏を通る電車や松虫草
一族の誰より長寿放屁虫
火柱のごと鶏頭の立ち並び

新潟 高野 松風

○蟬とんで不器用に逃げおほせたり
天牛の不意に目の前払ひたり
木洩れ日の移り真昼の蟬の穴
一望の青蘆原や雲の渦
亀田郷はむかし蘆沼稻の花

新潟 森山 眺湖

堰落つる音が風呼ぶ合歡の花
草原を弾けるやうに雪加たつ
○西瓜番閤をはさみて語り合ふ
町ぢゆうの屋根が暑さう終戦日
捨て畑白茅ちがやの花の埋めつくす

新潟 光岡 れい子

蓮の花くづれ花托の薄みどり

百五歳近くや百日紅咲く朝を
「雨ニモ負ケズ」諳ずる子や夏旺ん
庄司邸の波打つ玻璃戸守宮這ふ
終戦日麦飯食ぶる田舎カフエ

新潟 大村 かし子

門口に鬼百合どんと構へたる
味変へて三日つづきの胡瓜揉み
落雷や築七年の長屋門
夏霞筑波の二峰うつすらと
水甕の水を取り替ふ秋暑かな

新潟 阿久津 勝利

標識に文字のあやまり夏山路
熊笹のささ舟池に雲の峰
倒木にさらに倒木苔の花
老鶯や沼を囲みし白樺しらかんば
緑雨待つ苔一面の原生林

新潟 岡 佳子

星涼しさはさはさはと笹の音
白日傘の細きあぎとや歌碑じつと
掛香や鹿の子絞りを縫ひ上げて

もう一つ夏の月かな
遠雷や時々光る白き雲

佐野 増田 幸子

殻出でてみるみる大き羽化の蟬
舟幅の水路一すぢ蓮の中
蓮沼の風は青しとカフェテラス
まぶしさうに遠くを見やる生身魂
盆過ぎの卓袱台カレーライスかな

佐野 加藤 季代

盆用意けふ亡き夫の誕生日
京菓子の彩り秋となりにつけり
野葡萄や板碑の並ぶ旧街道
走り蕎麦壁に魚拓の黄ばみたる
ひと刷けの雲より秋の深みゆく

佐野 阿部 澄

そら豆のやうな男の子の甚平かな
ゆく夏や天井高き句会場
魂棚に一本清し女郎花
盆の客潮引くやうに帰りたる
ふるさとや道より低き葡萄棚

佐野 芝宮留美子

膝ついて子は水槽の金魚見る
掌の空蟬しかと爪立つる
小暗がりおはぐろ不意にひらひらと
みかんの木今朝の柚子坊見失ふ
すいつちよの草の緑の透くごとく

佐野 島田 和枝

ミント挿す厨の窓や風涼し
鴨居に置く焼印古りし登山杖
如雨露の水行きつ戻りつ鬼やんま
室の八嶋鎮もる朝の蟬時雨
折々の風を自在に軒風鈴

佐野 茂木 弘子

起きがけの雲間の青や秋隣
南瓜切る六十二キロの踵上げ
鳥影の無き日の暮るる極暑かな
聖堂へ夾竹桃の白つづく
例幣使街道沿ひの早稲稔る

佐野 売野 緑

みんなや冷感服の鳶頭

夏館景徳鎮の壺の藍
那須岳へ続く街道紺あぢさる
迎へ盆水らふそくの揺らめけり
ト口箱に二十四株稲の花

足利 大木

茂

棧敷組む鳶の地下足袋汗の塩
三県の境の標早稲稔る
独り走ることの青春秋の雲
対岸は新田の莊ぞ大花火
毛の国の閨稲妻の荒れ狂ふ

土浦 澤

照

枝

嶺々の沢へ棚田の水落す
○大吊橋疊んで渡る秋日傘
早稲実る笏を抱ふV字谷
龍棲むと伝ふ谷間の沢桔梗
さやけしや竜神峽に家五軒

さいたま

山本 右近

宵の灯に風はんなりと川床料理
鳴き龍の睨む八方秋氣濃し
腰低く膝繰り出して阿波踊

○風の来て止り直すや赤蜻蛉
蘆の花がぐれに小さき竹生鳥

所沢

三好 かほる

蟬とんで胸にぶつかる朝ばらけ
○鶏頭を描く余白を大切に
回廊の丸き柱や秋澄めり
藍甕に染めるハンカチ小鳥来る
少年の語部となる終戦日

所沢

森岡 恵子

風に揺る梅のさ枝の緑濃き
鳥わたる雲ひとつなき藍の空
丈高き青蘆原に風わたる
秋潮や壇ノ浦なるいくさ跡
冷やかや平家名残の七盛塚

所沢

南雲 秀子

花合歓の木蔭に山羊のねまりをり
せせらぎの藪をとび交ふ黒やんま
百段を上りて滝を見下ろせり
同胞の集ひて盆の月仰ぐ
わが庭の蜥蜴今年も健気なる

千葉 田 中 道 江

夕菅や三分停まる無人駅
たちまちに翠巒覆ふ白雨かな
鎌首をもたぐるクレイン大夕焼
赤^{浅出温泉}襷^{はねと}ひきずる跳人^{はねと}幼かな
しんがりの金魚佞武多は闇を曳く

千葉 松 浦 陵 保

父親を見様見真似で昆布刈る
立山を源として秋の水
今朝の秋鰯の顔は鬼に似る
竿燈の多彩な技や二百本
青りんご一本残し品種替ふ

酒々井 竹 澤 竹 里

送り火の護摩木走れば火も走る
大文字縦横斜め火が走る
朝霧や穂高稜線橋の上
萩アーチの門を潜りて祈願寺
干し網に残る銀鱗秋暑し
学校の亀を預かり夏休み

佐倉 内 海 保 子

野馬追の陣屋に並ぶパイプ椅子
月下美人地を擦りながら咲き出せり
餅して塩田平の威銃
花莫塵にひろげて鳥獣戯画の本

佐倉 大内 佐 奈 枝

濁流の一撃青田襲ひけり
朝顔を咲かせ家うち暗きかな
百日紅花のフリルは軽ろやかに
残る蟬われに向かうてぶつかり来
さうめんの硝子器に渦生まれたり

佐倉 三 屋 英 俊

我鬼の忌や目覚めたる眼が闇を見る
牛蛙闇に法螺貝ひびかせて
消えてなほ蛇眼裏を離れざる
大地灼け歪む線路や原爆忌
秋雲の流れて風に溶けゆけり

佐倉 横 川 良 子

夏逝くや岩波ホール閉館す
秋の浜足裏に余熱ありにけり
漁終へて舳先で寄する菱筵

秋の風纏ひ鎮もる無言館
小流れを集め膨るる秋の沼

四街道 奥 太 雅

牛蛙姫が入水の標かな
湿りたる土に翅閉づ黒揚羽
さみどりの翅を拡ぐる蟬の羽化
居眠れる人に隣りてレース編む
向日葵の種整然と渦巻けり

四街道 塗 木 翠 雲

くつきりと朝日を弾く真弓の実
草茂る信用金庫閉ぢし跡
風死すやオランダ風車羽根畳む
七十七年失せぬ記憶や原爆忌
夏座敷妻と指し合ふ将棋かな

船橋 山 下 良 江

赤とんぼ甲冑競馬の大馬場に
御神旗の降る夏空へ騎馬走る
大旗を振る野馬追の騎馬軍団
幟旗立て野馬追の汗みどろ
炎天や先祖の墓へ深き礼

船橋 大 山 春 江

置き去りの蓴菜舟や雨しとど
流木のからから乾く晩夏かな
戦鬨帽の父の遺影や八月来
○終生を野良着の母の墓洗ふ
願にひと^{わが}はけの紅合飲の花

船橋 赤 堀 洋 子

風蘭を鉢ごと夫と娘に供ふ
引越しの半ばの部屋の盆灯籠
おはぐろや霊のごとくに翅閉づる
風に飛ぶ蟬の骸の音たつる
火の焚けぬ盆の送りは灯を振つて

船橋 久 保 村 淑 子

配管工扇風機つきベスト着て
一日を無事に過ごして打水す
ハイボールの水かちりと暑氣払
○青海波紡ぐ飛魚つぎつぎと
遊び足らぬ子等日暮まで水鉄砲

船橋 片 桐 帆 一

蝶々の歩いてゐたり百日草

大夕立沖より来る三番瀬
道筋の紫蘇の葉を摘む二三枚
青黄の短冊目立つ星まつり
あばら骨撫でて見上ぐる盆の月

船橋 片桐 帆 一

堰止めて萍の花日を集む
組をはみ出すゴーヤ昼の鐘
軽トラの神輿路地より現るる
羅のをんな木蔭を選び行く
校庭の鉄棒三基日の盛

船橋 宮本 加津代

抱へたる日傘のほてり身のほてり
しらじらと咲いて一夜の烏瓜
二三枚葉を付け友の桃届く
夫在さば卒寿なりけり原爆忌
靴履いて帽子被つて浴衣の子

船橋 中嶋 久 登

大漁旗岸辺にずらり夏祭
担ぎ手の汗に溶け込むにはか雨
白蓮の花托に詰まる浄土かな

蓮見会四阿の椅子湿りたる
引出しの一番奥の蚊遣かな

柏 山本とく 江

風孕むはづみに散れり蓮の花
八朔やみどり深まる阿亀笹
朝涼や路地へ洩れくる般若経
かなかなに姉の初七日暮れにけり
底紅や秘めたるままに姉逝けり

柏 内田 郁代

百円の文庫本買ふ鷗外忌
熟れトマト烏が盗つてしまひけり
明易し庭の雀のよくしやべる
朝方により濃く匂ふ稲の花
みんなの声明のごと鳴きはじむ

柏 古川 京子

那智の滝裾まで降りて仰ぎたり
裏見の滝裏を瓦礫の占めゐたり
海色のあつぱつぱーで肉を焼く
広島忌キーウの春を語り合ひ
故郷の風のまにまに踊唄

流山 穂 莉 照 子

吹かれては色摺はるる蓮の花
七変化日差しに色を抜かれゆく

○参道の夕べは早し水を打つ
風変り蜩の声いつせいに
時計屋の時刻まちまち百日草

浦安 須 賀 允 子

谷崎 忌 父 の 本 棚 眼 裏 に
姉も逝き弟も逝く秋風裡
酷暑忘れ第七・第八ベートーヴェン
秋爽やか戦後の混乱生きぬいて
心の臓病む身に沁みる秋の風

浦安 田 中 幹 也

すいとんにしますかと妻終戦日
黙禱に重く鳴りたり鉄風鈴
特攻に憧れし日や茄子の花
○母運ぶ救急車追ふ子灼くる道
リハビリの踏む夏草の柔らかき

東京 名 和 政 代

歩道橋渡りかねたる残暑かな

御陵へゆつたり昇る夏の霧
胸高に風呂敷抱く月あかり
街路樹の団栗拾ふ子規忌かな
朝顔の蔓さまよへば救急車

東京 藤 田 裕 子

胸もとを少しゆるめて古団扇
こんなにも背丈伸びしか昼寝の子
霧霽れし束の間駒草そこここに
夜濯や友も家居に着くころか
製米を待つひとときや葭簀内

東京 赤 松 郁 代

竹伐つて山よりの風川の風
竹を伐るたびに青空ひろごれり
竹伐つて花筒とせり仏の間
むくむくと土をはじきて彼岸花
○裏返しうらがへしつつ泳ぐなり

東京 島 野 ひ さ

目薬師へお礼詣や雲の峰
赤とんぼすいと秩父は昏れゆけり
靖國の奥社へひらり黒揚羽

迎へ火も送り火も焚き一人なる
いそいそとバーゲンセールに水着買ふ

東京 加賀 葉子

夏空やクレーンゆつくり向きを変へ
手花火の香りを残し路地暮るる
捕虫網えいと伏せる子青芝生
地を歩む子烏へ鳴く親烏
脱皮して赤腹の赤鮮やかや

東京 久留島 規子

恙なく終る一日やかき氷
一頻りベランダにゐて蟬飛べり
台風に降り籠められし夜の茶漬
新涼の風に流るる髪細り
故郷は遠のくばかり孟蘭盆会

東京 下 嶽 孝一

頼朝の愛でし千貫松に蟬
風通ふ老舗に一つ江戸風鈴
商談に閉ぢて開きて白扇子
玉砂利の古墳ひぐらし鳴き通し
箸置きは笹ぶね賀茂の鮎料理

東京 杉 浦 一子

ぎらぎらと朝日輝く蟬時雨
夏季講習子供の帰るお昼時
浮葉より覗く水面や空の色
鮎釣や子の声混ざる川の音
頬を打つ風通り過ぐ秋隣

東京 草間 三香子

巾着を振りふり歩く浴衣の子
岩陰へ鯉の片寄る苔清水
噎せ返る夫の好みの心太
尼様の笠に触るるや赤とんぼ
赤とんぼ入場禁止の柵の上

東京 岡 村 純子

老鶯の声遠くより牧の朝
河童忌や雨音恋しと空仰ぐ
喪の家の風鈴一つ鳴りにけり
雷鳴の去り校庭に子等の湧く
鳩親子夕日の水脈を広げ行く

東京 桑 原 優美子

仲見世の裏薄暗く虫のこゑ

秋立つや鳥獸戯画のマグカップ
○糠床に胡瓜を沈め胡瓜抜く
盆休み模型電車が部屋回る
吹く風も空の青さも晩夏かな

武蔵野 砂地 宏子

夏雲やカーテン越しの母の空
きつぱりと毛筆書きで盆休み
静謐てふ骸となれり秋の蟬
賢治忌やセロ担当の老教師
ふいと来てふつと消えさる鬼やんま

調布 大林 彬彦

原子炉の廃水の海水母増ゆ
原発の灯のともる頃閑古鳥
大空に音吸はるるや原爆忌
赤児も今や喜寿の語部敗戦忌
零余子飯昭和のにはふ湯治宿

立川 正田 華子

向う岸大樹の天辺初紅葉
朝露の芝に鴉のつんのめる
今年また八月六日の百合の花

広島忌鴉高鳴く小半日
菊日和朱肉鮮やか遺言書

町田 広瀬 俊雄

青鷺の糞落としつつ谷戸の空
真昼日の女ひとりや田水沸く
生まれたての蟪蛄の斧やはらなる
優勝旗閔を越えたり夏の果
小学生でありし記憶や敗戦忌

町田 桔梗 純

朝粥に刻むかをりや茗荷の子
窓辺近きみんなみん蟬や広島忌
はみ出して羽搏きはげし燕の子
サングラス手放せぬまま今朝の秋
合唱の校歌に了す秋の宵

日野 喜多尾 明子

日当たりてはじき合ひたる目高の子
ひまはりの一本が立つ新居かな
鉄砲百合浮かべ熱低近づき来
秋立つや机上に広ぐ大アトラス
輪になつて歌ふ生徒の広島忌

横浜 西 本 才 子

照らし合ひ夜通し登る富士詣で
湧水に影流されて水芭蕉
睡蓮や昼の日差しの真上なり
盆東風や夕べの海の紺ふかし
るのこづち一人野川を跳びたる日

横浜 大 橋 雅 子

式典に合はせ黙禱朝曇
ガレージを覆ふ葡萄の袋掛
楊梅の潰れて染むるベンチかな
蒲の穂の揺れて触れ合ふ浄土池
入江向く木槿きはやか料理店

横浜 山 崎 郁 子

終戦を知らず
七十七年前三句

引揚船に雷雨来りし幼き日
甲板に母と仰ぎし夏の星
馬繋ぎ残る池の辺螢草
奥能登や千畳敷に海胆する

横浜 田 賀 樺 恵

遠山の稜線淡し秋立つ日

鯉の尾のゆらりともせぬ残暑かな

山鳩のこゑに目覚むる終戦日
色水を作りし昔おしろい花
ひぐらしや夫の残せし庭の下駄

横浜 小 板 橋 泰 山

モネ展に並ぶ乙女や白日傘
膝寄せて線香花火始めけり
新涼や風吹き抜くる通し土間
マスカット硝子小鉢のうすみどり
献花台百合の花粉の零れをり

川崎 新 妻 奎 子

熱帯魚壁のポスターとぼけ顔
もどかしく帯解きある溽暑かな
白菊の中に黄菊や子規の庭
黄昏に踊浴衣の藍にほふ
ぬかご飯えんえん続く俳談義

川崎 大 久 保 進

膝の子の寝息となりぬ団扇風
一匹は夜店の金魚理髪店
焦げパンにバター擦り込む溽暑かな

ゆく夏や慣れぬ接種のパイプ椅子
手水舎の使へぬままに秋の蟬

鎌倉 恒川 清爾

虹立つは祖母の願ひし浄土かな
パソコンもスマホも知らず蝸牛
秋暑し戦禍の報の終りなき

○魂迎へ癌と知らせず逝きし母
大文字消えて吾が家の魂送り
ゲルニカを4Kで観る敗戦忌

横須賀 織田 みさゑ

征きしまま還らぬ兄や敗戦忌
三番子の行方は知らず親燕
伏して泣く十八歳の終戦日
菩提寺の読経のもるる蟬時雨
遠泳の苦しさ偲ぶ八十路かな

伊勢原 佐藤 和子

おはぐろの飛ぶといふより止りをり
烏瓜咲いて紫紺の阿夫利山
片耳にマスクを垂らし秋暑し
口中の錠剤苦し敗戦日

野分あと隣合せに月と星

桑野 佐藤 嘉洋

大山の裾野広がる青田波
秋暑し水源跡の錆ポンプ
鬼胡桃一樹倒して川浚へ
川床を均すシヨベルや秋出水
潮汲の大八車 鯛雲

静岡 大村 峰子

打水や誰彼無しに会釈して
初百舌鳥に背筋を伸ばす朝かな
乾きたる音してとんばう向き変ふる
蚊帳吊草膝の赤チン喜ぶ子
播粉木のやうな胡瓜を貰ひけり

静岡 海野 みち子

茶の畝に手探りで採る茗荷の子
父の忌の近し黄菊の二つ三つ
蟪蛄の体揺らしつ飛ぶ構へ
踊唄聞きつ厨に立ちし日よ
勤勉な友の訃を聞く猛暑の日

静岡 宮崎知恵美

チエーンソーに切られ蝮の尾の動く
風鈴をあれこれ鳴らし一つ買ふ
時鳥真夜を通して鳴きにけり
○緑蔭や重機の夫に投げキッス
紫陽花は曇りが佳しと君が言ふ

静岡 長島 操

時鳥鳴くや夕餉の厨ごと
半夏雨浴びつつ畝に土を寄す
梅挽ぐや二の腕あらは枝を引き
夫の墓マーガレットの戦ぎけり
姉の忌や汗と涙の目に沁むる

静岡 岩崎武士

避難広場踊槽の立ちにけり
○村中の虫の集まる踊の灯
前掛けの子が仕切りたる地藏盆
推敲のまとまり付かぬ羽蟻の夜
風鈴の音にをさまりし愚痴ひとつ
敗戦忌南の島に父眠る

静岡 望月 敏男

青林檎胎児動くと娘言ふ
将棋盤を囲む翁のアロハシャツ
夏行くや輓馬の上ぐる砂煙
揚花火言問橋へ子を連れて
縁側に足裏の白き昼寝の子

静岡 藤原千代子

○炎昼やばりばり喰らふ集塵車
小粒には小粒の色や梅筵
玉の汗ファックス二枚受け取るに
九十歳の団扇の風に迎へらる
木苺を真つ赤に煮詰め魔女めけり
原爆忌空のかけらの水溜り

静岡 荻野加壽子

天道虫星になりたる途中かな
ガラス器の光集むる金玉糖
自販機に水を買うたり広島忌
原爆忌水の地球の渴ききり
夏果や手元に残る螺子ひとつ

静岡 小川 明 美

切岸を覆うてゐたり雪の下
滴りの雫に一葉揺れどほし
山雀の餌箱の下の食べこぼし
杣村の崖に張り付く岩たばこ
片蔭を選びて千段立石寺

静岡 藤 本 節 子

空調のかする音や熱帯夜
梅干して甕に沈むる日の匂ひ
トロ箱に咲かす朝顔何でも屋
透明の傘に涼しき雨躍る
直角に刈り込む垣や今朝の秋

静岡 大 長 文 昭

水くぼむ影おびただし水すまし
望郷の文字灼けゐたる化石句碑
真贋はどちらでもよしお風入れ
米櫃の底の米搔く敗戦日
山水にゆらゆら沈む新豆腐

静岡 加 山 ひ さ 子

新秋や母の遺せし万金丹

八朔や土の呼吸のとめどなし
つくばひに一筋の杓々なかな
波音のやうな風音土用かな
すれ違ふたびの声かけ山登る

静岡 吉 野 美 智 子

糠床に探り当てたる茄子の紺
ホテルの灯ゆるる川面や夏柳
ラジオよりカーペンターズ夜の秋
香りよき祖母の石挽麦こがし
ハンカチをぎゅつと握りて齒科の椅子

静岡 石 川 裕 子

時計草日暮に届く督促状
心太返事素直になりし夫
窓ガラスびりびり鳴らし揚花火
聞きとれぬ公報の声終戦忌
手に受くる冬瓜のつらちくちくと

静岡 本 多 ひ と み

垣を越す翅の欠けたる黒揚羽
緑蔭や土俵残りし神の庭
川岸に芥重なる梅雨出水

倒木に親指ほどの梅雨きのこ
交差点ある如止まる蟻の列

富山 若 島 久 清

沢水を刈り草で止めお茶冷やす
山半分お盆を目処に草刈りす
腰の山刀なたカタカタ鳴れり山紫陽花
○町中に水走る音盆近し
名も知らぬ山の上なる星涼し

射水 成瀬真紀子

おはぐろの影より黒き翅合はす
風鈴の音乗る風やシーツ干す
雪溪や鎖伝ひに行者道
行く夏や海王丸に乗る夕日
紙縫もて吊す短冊星今宵

金沢 中 條 睦 子

歩行器にたよる日々なり心天
夜の秋闇まさぐりて寝返りす
髪切つて試歩の一步に涼新た
糊ききし病衣や花火音ばかり
○田の隅に溝萩咲かせ母の里

金沢 今 越 み ち 子
電線にじつと子つばめ親を待つ
親燕に子等いつせいに羽撃けり

親去りて子つばめ羽をたたみけり
比咩宮ひめみやに詣で鮎鮎買ひにけり
雨上がりの清らかな町や盆の月

金沢 伊藤美音子

星涼し釣りの仕掛けのあれこれと
吊りもせず捨てられもせず木綿蚊帳
夏の雲鏡の中をせり上る
いちどきに開く山百合精舎跡
稲光豊作折念の神事利鎌食ひ込む御神木

金沢 高田たみ子

派出所のとんがり屋根や雲の峰
血止草の強き香好み朝涼し
墓訪へば風の道あり蟬時雨
黄金の藩主の兜青葉風
句碑の肩打ちて弾みし菩提の実

金沢 豊田高子

遠国おちの戦禍を逃れ鳥渡る

ねまり牛肚にくる蠅尾で払ひ
廃線の尾小屋鉄道葛なだる

○滝つ瀬の水音に太る胡桃かな
瀬の律に三段とびの黄鵠鶴

千畳敷ひたすら囓める土用波

金沢 松井佐枝子

菩提樹のそよぐ緑蔭純子句碑

葭障子開けて純子師あるやうな

○純子忌の過ぎし炎天嫌でなし

百歳のレイテ戦記や終戦日

下馬神へ太鼓減多打つ浴衣かな

金沢 石川純子

唐黍を拝む観音詣でかな

水引きにくくる唐黍魔除けなり

大やかんの唐黍茶汲む人の列

鬼やんま飛ぶを追ひたき今も尚

師の言葉今もしみ入る螢の夜

金沢 河野尚子

摺む子の手から食み出す蜥蜴の尾

鉄砲狭間抜けくる風の涼しかり

沙羅は実に眼下にひかる女川
膝かかへ幼飽かずに目高見る

窯小屋の煙る旧道百日紅

内藤 塩井志津

花火待つ一人一人の間かかへ

外浦の風吹き上ぐる滝飛沫

総身に青蔦まとふ古松かな

灼け砂や廃れ舟小屋沈みゆく

よろず屋の一隅けふは鰻焼く

七尾 谷渡末枝

○皮脱いで竹の太さの揃ふなり

堰を切り穂孕みの田へ朝の水

雲の峰原子炉ドーム踏んまへて

○縦糸を弛め土用の手織機

滴りを祀る酒蔵いと暗し

敦賀 倉谷紫龍

職終へて腰に蚊遣火畑仕事

子どもらのお七の芝居花鬼灯

炎昼や邪鬼踏みにじる香炉台

茶屋街の敷石ぬれて軒忍

夏まつり母結びたるおさげ髪

敦賀 倉谷ます美

高張は梅の朱紋や茅の輪組む
まなかひに金華山置き投網打つ
ピノキオの吊らるる茶房白夜かな
隠し田を見廻る老爺野分雲
古民家はよろず商ひ金魚玉

敦賀 鶴田勝子

花合歡のかざす岩肌磨崖仏
梅雨明や雲をつらぬく水難碑
石蓴舟傾げ嫗の手のさばき
外つ国へ発つ子と一夜夕端居
夏の月ほめき冷めゆく登り窯

敦賀 中川雅月

仏座す沼より出でし蓮の花
かづら橋揺らぐ踏板文月かな
秋立ちて朝一番の風甘し
ほおずきの花手向けたる濡れ仏
七夕の笹の香りや夕間暮れ

大阪 入山繁幸

やんばるの万緑かすめ米軍機
サングラス浜辺のをんな異人めき
熱帯魚群れ歓声の水中船
シーサーの赤屋根届く仏桑花
しばらくは静かな時間子の氷菓

徳島 福島吉美

乾拭きのかまち框の艶や夏椿
狛犬を洗ふお当家宵祭り
青蔦の納屋も母家も隠しけり
泳ぎては腹を温める川原石
昨日とは違ふ鐘音広島忌

徳島 村上和義

魚市場水打つてよりせり糶始む
てのひらの風より軽き蟬の殻
シヨパン聴くカフェの窓辺の水中花
帰省せしピアスの青年墓洗ふ
○戦争が茶の間に来り日雷

徳島 宮西修一

若竹や撓ふ力を秘めてをり

出目金や死は目玉よりはじまりし
仙人掌のドカンと開く朝かな
空港はかつて砂浜月見草
棚田には棚田の風や青田波

徳島 平岡

功

優曇華や床の間にある古時計
貴船茶屋瀬音もろとも心太
阿波弁の丸み親しや心太
小便小僧斜め夕立に身じろがず
南部風鈴旅の話の弾みたり

石井 木内 マヤ

峰雲を貫く東京行きジェット
眩しかりアユタや想ふ日の盛
みのむしの等間隔に明り窓
○その時刻鐘撞く寺や原爆忌
守宮の子口より大き蛾を食めり

室戸 安岡 みさき

ダツコちやんでふ海女^{あまぎ}衣^{てぐさ}着て石花菜採る
にぎはへる浦の食堂初鰹
糊効かせ叩いては干す宿浴衣

研ぎ減りの出刃包丁で鯖捌く
龍馬像胸をはだけて波涼し

高知 仙頭 宗峰

○伐る印巻かれし松の緑濃し
そよ風に生ける如しや蛇の衣
繕ろへばまだ着られそう蛇の衣
暴れ振り三基三様荒神興
夕焼や西方まさに炎上す

長崎 丸本 祥夫

喉の奥まで照らしたり大花火
開門を引き返したり夏燕
黒髪へ藤の花より雨雫
這ひ伸ぶる水鳴る方へ花南瓜
正教会夾竹桃の花真白

那覇 大湾 宗弘

精霊といふおもながの蟻蜥なり
銅羅のやうなる月の出を里の盆
阿檀熟れて大椰子蟹の夜となる
朝の庭檸檬にきざすレモン色
簪に欲しき髓甲蜻蛉かな

那 比 嘉 半 升

銀やんま米軍基地の空に消ゆ
家々に福の字屋根に南瓜かな
床の間の甕酒乞へり生身魂
ひとり酌む宿の裏座や虫の闇
板前の昏き足元ちちろ鳴く

那 當 間 シ ズ

夕端居隣家の赤児はつくしちやん
炎帝へ一歩怯むや玄関口
苔樋の滴り和する葉擦れかな
無住寺に泡盛の香と婆一人
片降りの降り残こしたる榕樹蔭

那 中 本 清

青パパヤ隣家の低き野面垣
桑の実を摘めり指先母に似て
ソーダ水海七彩にはじけたり
摩文仁野に灼け石拾ふ旅靴
苦瓜の蔓を払ひて村井道

西 原 宮 城 勉

再びの寿のつく齡冷奴

首里丘陵風あをあとソーダ氷
歳時記の夏の部厚し夜の秋
取りたてとゴーヤー膾一番座
○深海が兄の疎開地敗戦日

島見城 渡真利真澄

滴れる鍾乳洞に能舞台
囃方の能の佳境に夏の宵
声に出し糸目数ふる日の盛
難産の牛に海風星月夜
朝涼や甲烏賊の斑の動きけり

お詫びと訂正（10月号）

47ページの得点表の中、村田由美子様の列にある
「6」はひとつ上の函に入るものでした。

53ページ上段のお名前に誤りがありました。

誤 伊藤文恵様 正 伊東文恵様

右、お詫びして訂正致します。

同人作品の佳句

内海良太

突風に走る網戸の右ひだり 落合裕子

滑りのいい網戸のようだ。突風の少しの風向きの変化にも右に行ったり、左に行ったり。それを作者は「あらあら」と面白がっているのがいい。

昔、「網戸」は夏季の防虫用の建具の一つで、戸車の付いた木枠の網戸だった。今日ではアルミサッシの発達から網戸の種類も多くなり一年中設置されている。「網戸」という夏らしい季語の本意も情趣も時代と共に変わりつつある。

蟬とんで不器用に逃げおぼせたり 高野松風

蟬が何かの危険を感じたのだろう。目の前をいきなりジジと鳴きながら飛び去る場面に出会うことがある。大抵は翅をばたつかせながら建物に当たったり、木にぶつかったりで不器用に見える。この句は蟬取りの子から脱出した場面だろうか、作者は不器用に脱出した蟬を優しい眼で見ている。

西瓜番間をはさみて語り合ふ 森山暁湖

畑の作物の盗難が多いらしい。最近の新聞やTVに山梨県の桃畑から収穫間近の桃や、埼玉県の梨畑から出荷直前の梨が大量に盗難にあったという。農家のこれまでのご苦労を思うと誠に気の毒なことである。

この句は西瓜畑。収穫間近になるとここにも怪しからぬ輩

が出没するらしい。この番小屋は二人で夜を徹して見張っている。退屈紛れにぼそぼそと語り合いながら。

淋しさに又銅鑼打つや鹿火屋守

右の句は、原石鼎の代表句。奈良県東吉野の山中で猪や鹿から畑を守るため火を焚いて番をする鹿火屋守。闇夜の一人の淋しさを紛らわすためには銅鑼を打つしかない。

原石鼎のこの句は私の若い頃の愛誦句だった。

舟幅の水路一すち蓮の中 増田幸子

この舟幅の水路は蓮池を管理する舟のものか、それともやや大型の観光用の蓮見舟のものだろうか。

蓮見舟が妥当なところだが、「蓮の中」とあるので、蓮の中を分け行く狭い水路を残した管理の舟とみた方が新しみがあつて面白い。これを踏まえてもう一句作るといい。

風の来て止り直すや赤蜻蛉 山本右近

蜻蛉がものに止まって翅を下げて落ち着いたのかと思うと、少しの風でまたフツと飛び上がり様子を窺う。

これを何回もくりかえすのを、「止り直す」と言い止めたのが適切。ペテラン右近さんの写生の態度が好ましい。

鶏頭を描く余白を大切に 三好かほる

「絵は余白が大切」という言葉がある、三好さんはその言葉を踏まえながら鶏頭を描いているのだろう。余白は俳句でいえば「切れ」の部分。余白や切れには何らかのメッセージが込められているものだ。

「万象」誌の表紙裏と1ページに大きな余白がある。初代

「万象」編集長は、この余白が大切なんだと胸を張った。

青海波紡ぐ飛魚つぎつぎと 久保村淑子

広辞苑によると「青海波」は舞曲に用いる波形を描いた衣服の文様、またそれと同様の波文様をいうとある。

我々がよく目にするのは、渦を四分したような形の文様を幾つも重ねたもので、その文様の中に鳥（千鳥か？）があしらってある。句はこの青海波を背景に千鳥ではなく飛魚を取り合わせた感覚が新しく面白。

私も嘗てこのような光景を見たことがある。東京湾フェリーに乗船したとき、波を背景に多くの飛魚が船と競争するようにジャンプをしていた。子供達は「ツツピン飛魚」の童謡を歌いながらそれを眺めていた。

魂迎へ癌と知らせず逝きし母 恒川清爾

お盆が近づくといろいろ回想することが多い。恒川さんは病んでいた母に、どうしても癌であるとは言い出せなかった。私にも同じ経験があるので、身につまされる。

十年ほど前、「万象」で「風」の若きホープ「川口重美」の特集をしたことがある。重美の友人の上野燎先生にインタビューをさせていただいた。このときに「白萩や昔は癌と知らせずに 燎」の染筆を頂いたのを思い出した。

上野燎先生も先年、故郷山口市で癌で亡くなられた。

村中の虫の集まる踊の灯 岩崎武士

村祭り実行委員会が今年は盆踊大会を開催と決定した。なにしろ三年ぶりなので、日暮を待ちきれずもう踊唄が流れ、

太鼓が鳴っている。近隣からも多くの人が集まってくる。

久しぶりの眩い灯火に村中の虫も集まって、わんわん乱舞している。人も虫も解放され、久しぶりを喜んでいようだ。

田の隅に溝萩咲かせ母の里 中條睦子

溝萩は祖霊を祀る盆の供花によく使われ、精霊花ともよばれている。地方では各家が自家専用の花畑を持ち、供花や切り花などは自給自足で賄っている。中條さんの母の故郷も同じで、季節になると同じところにいつもの花が咲く。

今年も田の隅に溝萩が咲き、あの淡紅紫色のツブツブの花を見ると母と盆が近いことを実感する。

純子忌の過ぎし炎天嫌でなし 松井佐枝子

7月28日は中山純子先生の忌日。訃報が皆に走った日も暑かったが、夏の暑さはこれからが本番という頃だった。

人には夏型、冬型があるという。松井さんは夏の好きなタイプらしい。炎天の金沢の郊外を歩きながら、中山純子師のあれこれを偲ぶのも悪くない。

縦糸を弛め土用の手織機 谷渡末枝

機織のことはよく知らないが、それでも成る程そうなのかと思わせるように、句に説得力がある。

機織の機械を想像すると、ピンと張っている縦糸（経）に横糸（緯）が上をいったり、下をくぐったりしながら織り上げていくのだが、気温や湿度によって縦糸の張りの強度を微妙に調整するということなのだろう。温度と湿度管理はどの生産業でも同じで最も注意を払う。認識の句。

同人会だより

第五回「中山純子記念俳句賞」作品募集

故中山純子先生の功績を顕彰、記念するために企画した賞です。年一回、同人より作品を募り優秀作品を表彰、「万象」同人俳句の向上、発展に資するもので、多数の応募を期待しています。

応募資格 「万象」同人に限る。

作品 15句、未発表作品に限る。

四百字詰原稿用紙(B4判)とし、冒頭欄外に題名を記入、また末尾欄外に住所、氏名を明記し、一通(コピー可)を提出のこと。封筒に

「中山純子記念俳句賞応募」と朱書きのこと。

内海良太、江見悦子、小林愛子、福島せいぎ、

柳澤宗正、井村和子、曾根 満

締切 令和5年1月31日(火) ↑「締切日注意」

宛先 「万象」石川県支部

〒920-0926

金沢市暁町18-38 中條睦子

入賞発表 「万象」6月号(優秀作品、選考経過を掲載)

全国俳句大会で受賞者を表彰。

追記 Eメール応募の場合は次の二名へ同時発信のこと。

n.chujo@m3space.ne.jp 中條 睦子

makitab2014@gmail.com 成瀬真紀子

註【令和5年より同人総会は全国俳句大会と併せて実施】

8月「万象」オンライン同人句会の結果報告

【7点句】

風の盆果て藤色の夜明けかな 成瀬真紀子(射水)

【6点句】

シャッターに廃業の謝辞いわし雲 桑原優美子(東京)

初さんま地球こんなに瘦せたるか 奥 太雅(四街道)

【5点句】

林火忌や辞書にしをりの古切符 小坂橋泰山(横浜)

終戦日浜に数多の蟹の穴 穂苅 照子(流山)

【4点句】

蟻の引く飽食の世の欠けらかな 下嶽 孝一(東京)

野分晴土尖らせて乾きけり 荻野加壽子(静岡)

どの田にも一段稲架や千枚田 岩崎 武士(静岡)

ぐんぐんと富士の高さを鷹柱 岩崎 武士(静岡)

老猿の風をみてゐる晩夏かな 中村 千久(志木)

威銃はたと案山子の倒れけり 内海 良太(佐倉)

霧雨にけふる馬車道灯のほのか 大久保 進(川崎)

【3点句】

秋灯校舎二階の部屋二つ 入山 繁幸(大阪)

火祭の明け富士の山水色に 江見 悦子(東京)

御師の家の一閑廊下涼新た 江見 悦子(東京)

切戻すバジルのかをり涼新た 古川 京子(柏)

雨戸繰り二百十日の空を見る 岩崎 武士(静岡)

新同人発表

次の諸氏を「万象」新同人（令和4年11月1日付）に決定しましたので発表します。

太田 佳美（江別）

三木 豊子（横浜）

喜多恭仁子（千葉）

三村 紀子（東京）

岡田あゆみ（小松島）

道場 啓子（金沢）

小池 清晴（東京）

主宰 江見悦子

新同人の皆さんへ

令和4年度、万象俳句会の新同人の皆さん、おめでとうございます。

10月の全国俳句大会で親しくお目に掛かり、お祝いすることを楽しみにしていましたが、コロナ禍のため大会を中止せざるを得ず、大変残念な思いです。

「万象」に入会以来年月を重ね、句友と切磋琢磨されてきた皆さんの、持続力と集中力に敬意を表したいと思います。

「万象」は、「風」の結社理念を継承し、「俳句実作の態度・方法としての即物具象の写生」を基本に、今年は創刊21年目を迎えました。

「万象更新」という言葉通り、新同人の皆さんを迎え、新たに全員で、「個性と新しみのある俳句」を目指し、「詩として魅力ある俳句」作りを楽しんで行きたいと思っています。

皆さんのそれぞれの句会での活躍が、「万象」全体のものに広がることを期待しています。

どうぞよろしくお願い致します。

主宰 江見悦子



太田佳美 (江別)

昭和25年 北海道生まれ
平成16年 「万象」入会
〒069-0813 北海道江別市野幌町28-7

この度は「万象」同人にご推薦いただき、これまでご指導くださった方々に心よりお礼申し上げます。

「俳句をやってみない？」と誘われて諸先輩の並ぶ句会に顔を出した時のことを覚えております。二つの仕事を掛け持ちし、都合の良い時だけ出席しながらのスタートでしたが、共感のできる句に出会えると、これまでに感じたことのない幸福感もありました。その後母の介護もありましたが、月に二回の札幌句会へ通う俳句生活が定着しています。北海道の十勝に生まれ、豊かな自然の中で過ごした日々や帰省の度に味わう力強さと優しさはゆるぎないもので、生きる力となっております。

「万象」で俳句を学ぶ日々の生活で花鳥風月を意識する時間が増えた気がします。感受性の鋭い方ではなく生活句中心になります。多作多捨て何かが見えてくるのを期待しています。未熟者ですが未永くこの世界で一緒にさせていただきます。



三木豊子 (横浜)

昭和12年 神奈川県生まれ
平成14年 「万象」入会
〒240-0042 神奈川県横浜市保土ヶ谷区上星川2-26-12

この度は、「万象」新同人にご推挙いただき、有難く心より御礼申し上げます。

永く勤めていた建設会社を退職し、さてこれから何をしようかと迷っておりました折、友人に俳句の会に参加してみないかと誘われたのが俳句との出会いでした。

もともと兄が短歌に親しんでおり、作品作りに苦勞しているのを身近に見ていたもので、表現の世界は違っても果たして自分に俳句を作ることが出来るのか、不安がありました。そして保土ヶ谷句会の当日、やっとの思いで七句を作って参加いたしました。句会というものを目の当たりにして、とても感動しました。そして、この見学を機に、保土ヶ谷句会で勉強させて頂くことを決意し、「万象」に入会いたしました。

以後、小林愛子先生に即物具象の写生を自分の言葉で表現する様、ご指導頂いております。新同人として不安もありますが、これからも精進を重ねて参ります。



喜多恭仁子 (恭子)
(千葉)

昭和18年 兵庫県生まれ

昭和57年 「日航俳句会」 入会

昭和58年 「風」 入会

平成14年 「万象」 入会

〒263-0054 千葉県千葉市稲毛区宮野木町1551-142

昨年暮れに大内佐奈枝先生より「来年三月号の巻頭に残されたので、恭仁子さんのプロフィールを書くことになったのよ。よろしくね。」と電話がありました。

老後の楽しみ、ボケ防止、俳句を嗜んでいた父の話し相手でも、と気楽に楽しんでた私には、まさに青天の霹靂。ましてや百一歳の母の介護が続く私に同人が務まるのかと、大変悩みましたが、これもご縁と有難くお受けすることにしました。

俳句との出会いは、昭和52年。33歳の時に夫が急逝、夫の勤務先だった日本航空に嘱託として入社、職場句会を知り入会指導者の宮川杵名男先生の勧めで「風」に入会、「万象」へと続けてきました。令和三年十月の創刊20周年記念号で、小林愛子先生の四句選と佳句を頂いたのが一番の喜びでした。今は作句の傍ら、母にオカリナを聞かせることと、週2回介護施設でのボランティア活動をライフワークとして楽しんでおります。



三村紀子 (東京)

昭和41年 東京都生まれ

平成17年 「万象」 入会

〒110-0008 東京都台東区池之端

2-7-15 15-402

この度は「万象」新同人にご推挙いただき、誠にありがとうございます。毎月締め切り間際に頭を抱えながら句を作っている私が、新人賞に続きこのような栄に浴することに戸惑いもありますが、これを機に初心に返り精進してまいりたいと思います。

私の俳句歴は、軽い気持ちで参加した母校同窓会主催の講習会で飛高隆夫先生の教えを受けたことに始まります。「万象」入会后、長らく俳句から離れていた時期もありましたが、令和2年に投句を再開し浦和句会で勉強させていただきました。私は11年前に急逝した父の跡を継ぎ、半導体製造装置業界の片隅で中小企業の経営にあたっております。現在、同業界は空前の好況に沸いており、当社も急増する需要に対応すべく工場を増設したところですが、製造業を取り巻く環境は厳しく悩みは尽きません。仕事中心の日々の中で、心に残りと安らぎを与えてくれる俳句に感謝しています。



おかだ あゆみ (隆子)
岡田 あゆみ (小松島)

昭和27年 徳島県生まれ

平成21年 「なると」入会

平成28年 「万象」入会

〒773-0024 徳島県小松島市間新田町ヤケ木173-13

この度は、「万象」新同人に推挙いただきありがとうございます。ございました。福島せいぎ先生の俳句結社「なると」に入会して13年。まだまだ勉強不足ですが、頑張りたいと思いますので、ご指導の程よろしく願います。

私は、養護教諭として、徳島で35年間勤めました。大規模校、小規模校、山間、海辺等、いろいろな学校で、子供たちや教職員と接し、楽しい思い出がたくさんできました。その体験から、今でもふつと俳句の生まれる瞬間があります。

趣味は、旅行、バードウォッチング、ピアノ。旅行は、今はコロナ禍のため遠出ができません、友人と県内を巡って、新しい発見を楽しんでいます。バードウォッチングは、毎月行われる四ヶ所の探鳥会に参加し、新しい鳥と出会える喜びを味わっています。また、探鳥会では植物や昆虫等の事も、その場その場で教えてくださる方が多く、俳句作りにとってもいい勉強になっています。



どう ば けい こ
道場 啓子 (金沢)

昭和22年 石川県生まれ

平成8年 「風」入会

平成14年 「万象」入会

〒921-8171 石川県金沢市富樫2-7-4

俳句には全く無縁であった私が、50歳を前にかねてより尊敬する先輩に勧められて、俳句を始めました。

中山純子先生がどのようなお方であられるのか何も知らずに、先生が指導される一句会で学ばせていただけた事は、今から思えばそれは、青天の霹靂以外の言葉では表せない程、大変に有り難いことでした。

先生の暖かいご指導と、句友の皆様の励ましに支えられ、いつしか俳句の魅力と、自然や身の回りの生活全般に心を通わせる楽しさに取り憑かれ、今日に至っております。

この度、まだまだ未熟で力不足の私を「万象」同人に推挙していただきました事は、恐れ多く心苦しいばかりでございます。

これからは、もっとも身の回りの事柄に関心をもち、感動できる目と心を養っていききたいと思っています。益々のご指導ご鞭撻よろしくお願い申し上げます。



小池 清晴 (東京)

〒132-0035

昭和29年 東京都生まれ
平成28年 「万象」入会
東京都江戸川区平井2-17-1

私と俳句との付き合いは、平成二十八年初夏に、隣に住んでいる方から、俳句のお誘いを受けたことから始まりです。小松川句会に参加しても、皆さまの投句を清記する段階で、漢字の読み方が分からず、毎回、江見先生に訊きに行く有様でした。それでも、嫌な顔一つせず、根気よくご指導いただいたことに感謝しております。その後、コロナ禍の影響で、対面による句会の開催ができなくなりました。

ところが、このことが俳句との付き合いを深める契機になろうとは考えてもおりませんでした。メールや郵便による通信句会への移行により、そのとりまとめをやらせていただいた御蔭です。

毎月七十句から八十句を精読し、分からない漢字があれば調べ、それでも分からなければ江見先生に訊ねるということが、多分、今回の巻頭掲載へと繋がっていたのではないのでしょうか。

雑学鳥獣植物戯詩

全24回 八木幹夫

第21回【赤まんま——さらば、清水哲男——】

清水哲男さんが2022年3月7日に亡くなった。詩人としては現代の詩集賞（H氏賞、詩歌文学館賞、萩原朔太郎賞、晩翠賞、三好達治賞、丸山薫賞等）のほとんどを受賞しているが、俳句の世界でも知らない人はいないほどだ。ネット上の「増殖する俳句歳時記」は20年間、毎日欠かさず一句鑑賞を掲載し続けた。俳句独自の師系や結社にこだわらず、広い視野の鑑賞は俳人だけでなく様々な人々に俳句の魅力を伝え続けた。

野球好きで、みずから草野球チーム「ポエムズ」の監督を引き受け、詩人たちを多摩川べりに集め、野に遊ぶ喜びを広めた。セントラルリーグの日程表制作に関わった詩人で作家の清岡卓行氏とも交流があった。（猛打賞の名付け親。はじめは巨人ファンだったが、ある時期からは「さらば、東京巨人軍。」というエッセイ集でアンチ巨人の立場を表明。以後、哲男さんと麦酒を呑み交わしても巨人戦の話はタブーとなった。私は巨人ファンをやめられなかったからだ。父の世代の赤バット川上哲治の残影のためだ。清水哲男追悼句会での選外句。

多摩川に赤バットふる赤まんま 山羊

成田祇園祭

奥 太雅

縁石に腰を連ねて山車を待つ
弓張の提灯かざす山車の勢子
門前の坂を一気に人形山車
二階より祝儀差し出す山車の屋根
蒲焼の匂ふ門前山車を曳く
ペットボトル祭衣に見え隠れ
手をつなぐ親子揃ひの祭髪
幼子の氷菓の色に口染むる
鷹女像背に墨痕の幟立つ
裏方へ届く祭りのお弁当



今年はコロナの影響で、毎年行く成田山の初詣にも行けなかったが、成田の祇園祭が7月の8日、9日、10日の三日間、三年ぶりに開催され、見物に出かけた。好天に恵まれ、盛大に開催されたが、完全な復活ではなく、山車の巡行時間や回数等を制限し、参道の露店は中止となった。また、山車、屋台、神輿の揃う総踊りも中止された。

とは言え、やはりお祭り。山車が近付いて来るとその歓声が心踊らされるのは幾つになっても同じである。

虹二重

加山ひさ子

春月へ近づくビルのエレベーター
ヴィオロンを背負ふ少女や虹二重
電柱の陰にすつぽり日焼の子
まだ慣れぬ独り暮らしや水中花
かげろふの命透けたる翹づかひ
昼寝子に不意にこぼるる笑まひかな
海へ向く四人の親子ラムネ飲む
冷し酒ひと日終へたる安堵かな
慣れて来し独りの暮らし秋刀魚焼く
効能書読んで独りの夜長かな



気分転換に安倍川の河口から海沿いに清水までドライブをする。駿河湾はその日の天候により、海の色や波の高さなど毎回違う。また日中、夕暮れ時、真夜中とそれぞれであり、日本一深い湾である。

清水港は国際港湾であり、沖待ちの船が並ぶこともある。動いていないようで動いており、ゆっくりと時間が流れている。帰り道は、またまた違う風景に出会うことができる。

静岡に住んでいるからこそその日常を楽しんでいる。

暑に耐ふる

神田美穂子

廃屋の軒につばくら泥運ぶ

燕が泥を運んでいく先は廃屋の軒。燕にとつては廃屋であらうがなからうが関係なく、安全を見極めたところに巢を作り始める。エッセイに「家から徒歩5分圏内に宅地造成が始まっている」とある。まもなく子育てをする燕を氣遣う作者が浮かぶ。

植ゑたての溺れさうなる早苗かな

昔の田植は緋姿の早乙女が主役、現在は田植機が主流である。植ゑ終わった後の田には水が満々として沼のような光景が広がる。見えているのは苗の先のみ。「溺れさうなる」の擬人化表現に、早苗はすっかり根付いているだろうかと心配する作者の気持ちがよく現れている。

大富士に点ほどの雪 夏祓

夏祓は6月晦日に行う神事である。何処の神社でも茅の輪を立て、自由に8の字にくぐり、無病息災、厄除けの祈願をさせてくれる。富士山麓に住む作者の、常に霊山の富士に見守られている幸せの日々。この日、点ほどの雪を見逃さずに、素直に、整然とした大富士の姿に仕立てた。

暑に耐ふる夫の畑のものを食うて

ご主人の畑で収穫した茄子、胡瓜、トマト等々を想像した。暑い盛りに採り立ての野菜は、火照る体を癒してくれる。懸命に耕して、生り物を作ってくれることに感謝している作者である。

能十忌

山本右近

エッセイに「謡曲を始めて60年になる。――演じられる主人公(シテ)は神や霊や精など超現実的な存在が多く、理解がとて厄介」とある。題名「能十忌」に、能と俳句の関わり合いを読み取る重みと深さを感じた。

コロナなき佐渡の舞台や俊寛忌

コロナ禍で生活行動が制限されている中、佐渡へ行かれたのか。俊寛忌は陰暦3月2日。俊寛は平安末期の悲劇的な運命に翻弄された僧であった。佐渡には能舞台が30以上もあり、生活の中に溶け込んでいるという。作者は空気が殊のほか心地良い佐渡の能舞台で謡曲を朗吟したのだろうかと思像した。

宿題の九九解く子方梅若忌

陰暦3月15日は謡曲「隅田川」などで名高い梅若丸の忌日。子供を攫われた母が行方を尋ねて隅田川まで下り、岸辺の梅若丸の墓で悲嘆に沈むという内容で、「子方」は子役が演じる役。能の稽古の合間に、舞台の袖で宿題の「九九」を誦んじている子方。普通の子供なのである。

時頼忌 松盆栽に通る雨

作者の住むさいたま市に「盆栽村」がある。大宮盆栽美術館の年代物の松盆栽に見入る作者を想像した。不意の通り雨に濡れて帰宅したこの日は、北条時頼の忌日、陰暦の11月23日であった。能の作品「鉢木」に登場する「旅の僧」は時頼である。

同人作品鑑賞（九月号） 小川明美

新茶摘み終へ二番茶の青あをと 南雲秀子

一番茶の収穫後、二週間くらいで新しい芽が出てくる。二か月後にはこの芽が成長し、また収穫する。この茶を二番茶という。

私の住む静岡では、五月の連休に家族や親戚、さらには知り合いに声をかけ新茶を摘む。茶農家は、それで終わりでなく、さらに二か月後にまた二番茶の収穫が待っている。「青あをと」でその大変さが喜びに変わる。

桐咲くや書き込み多き母の辞書 岡村純子

中国では、「鳳凰は桐の木に棲み、竹の実を食べる」と言われ、神の使いである鳳凰が宿ることから桐の木は特別の意味を持つ。

また、日本の農家では、女の子が生まれると、桐の苗木を植え、嫁入りの時にそれを使い家具を作った。

作者は、母親の辞書を捲り、母の生きざまを垣間見た。季語の「桐の花」の斡旋で句に深みが増した。

泥に生れ泥に染まらぬ睡蓮花 宮崎知恵美

睡蓮は、学名 *Nymphaea*、ギリシャ神話の水の妖精 *Nympha*（ニンファ）に由来する。

葉の間から顔を出す花には、妖精のような可憐さや高貴な雰囲気がある。作者は、それが泥から生まれたことに神秘さを感じ、泥とは全く対照的な美しさに心を奪われている。

船長の片耳ピアス船遊び 成瀬真紀子

「船遊び」なんと優雅な娯楽だろう。

江戸時代、水路を巡らし物資の運搬には船が活躍した。隅田川を上る船遊びは粹とされ、岸の景色を風に吹かれながら楽しんだのだろう。

作者の乗られた船の船長さんは、ピアスをつけていた。しかも片耳だけと写生している。お洒落な若者が想像でき、私も乗ってみたいと羨ましく感じた。

古墳山蟬の声明染み入りて 豊田高子

日本列島に約十六万基あると言われる古墳。築造当時は石で覆われていた。年月を経て、緑が茂り、木々が育ち、その木々に今蟬が鳴いている。しかも、ただ鳴いているのではなく、「声明」を唱えているという。鳴き声を声明と言い切ったところに重みがある。



雪の日に

細見綾子

今年には三八豪雪（昭和三十八年）以来の大雪らしい。

北国の、どか雪のありさま、交通の乱れなどが毎日報じられている。金沢からも屋根の雪おろしを何回かしたと便りが来た。私は八年住んだ金沢の雪をたいそう身近に感じる。

一時は真宗の寺の一部を借りて住んだこともあり、この寺で暮らした二年あまりも雪のことは記憶している。毎朝、魚売りのおばさんが来た。湯でとれた淡水魚を売りに来るのだ。しじみ、鮎、鮎、白魚など。とれたばかりの透けた白魚をひとすくい買う。

雪今日も白魚を買ひ目の多し 綾子

鮎は跳ねていて、鮎汁にするのがうしろめたかった。

私は寺のおばさんから鮎や鮎の料理をおそわった。

金沢の人たちは雪の降らない冬は何やらさびしいという。大雪が降れば困ることが多いが、それでも雪を待っているのだ。雪が降ればそれに適応する暮らし方が微妙に培われているのを感じる。

野に降り山に降る雪と変りないのだが、金沢の雪はより多く人々の生活の中に降る。心情の中にも、と言えるかもしれぬ。

雪の日によく私は訪問を受けた。これは他の土地では考えられない。どうしておられるのかと思うて、と、わが身も濡れながら美しいお菓子を持って訪れる。雪の日の訪れはうれしい。金沢には銘菓が多いが、これも雪の日の人の気持ちをひきたたせるためのものではないかと今ふと思う。

先ごろ北陸出身の画家が来て、古九谷の話をした。その画家は、昔の金沢では婚禮、仏事、その他大切な客事はたいてい正月もすんだ一月、二月に行なったと言う。一番雪の多い季節に家伝の九谷焼を取り出して使う。いつでも背景には雪がある。真っ白な雪の背景なしに古九谷の美はあり得ないと強調したが、なるほどそうかもしれぬ。紫、黄、緑、青、赤、五彩の洗練された美しさは雪の日に見るべきものとして産み出されたものかもしれぬ。

昨春秋、私は兼六園の美術館にゆき、旧知の古九谷を見ながら雪の日を思った。

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ③

橋本 清

慶雲三年丙午きょううん へいご 難波宮に幸せる時に

志貴皇子しきのみこの作らす歌

葦あし行ゆく 鴨鴨の羽はがひに 霜降しもふりりて

寒さき夕ゆふは 大和やまとし思おもほゆ (一・六四)

「葦の茂る水辺を行く鴨の翼に霜が降り置いて、寒さが身にしみるこの夕べは、大和のことが恋しくてならない。」

慶雲三年（七〇六）、文武天皇の難波宮行幸に随行した時の歌。『続日本紀』によれば、この行幸は九月二十五日から十月十二日の間で、太陽暦でいえば、十一月九日から二十五日の間に当たります。作者の志貴皇子は天智天皇の第七皇子。

難波宮は今の大阪城の近くにあった宮殿。当時は海がその近くまで入り込み、潟となって葦が生い茂っていました。難波江とか難波潟と呼ばれて、歌によく詠まれるようになった所。

時は十一月中旬から下旬の頃。日が暮れば、冷たい霜はそれこそ天に満ち、そこかしこに降りていたことでしょう。それを水面に漂い行く鴨の翼の上に見出している。この着眼がすばらしい。これによって生き物のあわれさが隠

し味のようになって旅情を深くするのです。

寒さを詠んだ歌は少なからずあります。しかし、この歌のようにそれを視覚でとらえた歌は、『万葉集』で他に例が見当たらない。いかにも寒々とした風景がこの歌に生々しい臨場感を与えています。作者の身分から考えて、おそらく宮殿内で催された饗宴での作でしょう。この歌が披露された時、その場にいた人々は、目の前に初冬の難波江がいきなり出現したかのような錯覚に陥ったかもしれません。ロラン・バルトの口真似をすれば、風景の「家宅侵入」(ちくま学芸文庫「表徴の帝国」)です。それほどイメージを喚起する力のある歌。

志貴皇子は『万葉集』に六首の短歌を残しています。ここで他の巻にある歌も紹介しておきます。次は中学や高校の教科書にもよく採用される有名な作品。

志貴皇子しきのみこの權みさびの御歌みか一首

石走いはしる 垂水たるみづの上うへの さわらびの

萌もえ出いづる春はるに なりにけるかも (八・一四一八)
「岩の上を激しく流れ落ちる滝のほとりのわらびが、芽を出してくる春になったことだ。」

これも数ある風物の中から「さわらび」を選んだ着眼がすばらしい。それが呼び起こす清新な抒情性には目を見張るものがあります。主観的な表現は用いていないにもかかわらず、春を迎えた喜びが作品全体から匂い立ってくる。



林住期の路地

敦賀 中村 優

立葵の花弁を顔に付けて遊んだ幼年期の路地。部活動の帰りコッペパンをかじりながら歩いた少年期の路地。受験という重荷を背負いながら恋という言葉に憧れ海へ向かった思春期の路地。夢だった都会での学生生活に幻滅しバイトの日給を握って大衆食堂に通っていた青年期の路地。社会人となり、深夜まで開いている店を探し共同トイレでゲロを吐いている壮年期の路地。この人しかいないと決め、星空の下で求婚した恋愛期の路地。子供たちを育てることに精一杯で、感謝の言葉も言えないまま親を見送り、人に見られないように涙した熟年期の路地。

そして今、幼稚園へお迎えに行った私を置き去りに路地を走る孫を追いかけている。

路地裏に光をまとふ道をしへ
路地に句材を求める「林住期」である。

路地の亀

静岡 大長文昭

いつの頃から、ラジオ体操が終ると参加者を募って歩くようになった。

参加者が増えると、危険を避けて自然に裏通りをよく歩いた。すると路地はすべての物に近い道だと悟った。

人々の話し声、茶碗を洗う音、犬の声など通るだけで住む人々の生活が分かる。歩く私たちも子供を起こす時計代わりになる。「今日は遅いね」等と住民との交流が始まる。角の家の犬猫の心配、季節の櫓を伝う蔓薔薇の事等話題は尽きない。

ある時路地奥の家の、普段は気に留めなかった石の鉢に寄ってみると、なんと「亀だ!」の声。親爺の亀談議の、「この亀はもう三十年この鉢の中にい

るヨ」に驚く。しかし、路地歩きは寄る年波に勝てず自然消滅。時々あの亀は元気かしらと懐かしんでいる。

尾道の魅力

つづば 藤原善明

私の故郷は広島県福山市で、近くに尾道という町がある。尾道と言えば、映画の町として全国的にも有名である。

最近はお洒落なカフェなども増えてきたが、どこか昭和の香りがする町なのである。それはなぜなのだろう。尾道は山が迫っているため、あちこちに坂道があり、路地裏も多くあるので、郷愁を誘う町になるのだろう。尾道は文学の町としても名高いが、それも頷ける。

尾道には、奥の細道ならぬ、猫の細道なるものもある。また、正岡子規などの句碑もあり、観光客が俳句を投稿できる俳句塔もあり、俳句ファンにはたまらない。

機会があれば、尾道を尋ねてみてはいかがでしょう。

路地の先

東京 齊藤孝夫

路地、石畳で犬矢来が並び人力車が通れる幅、そして板塀で見越しの松が覗いているなんぞと言うのが句になりそう。下町では路地側に向いて物干し場があり、お隣と朝顔の出来を競っているような路地が風情というもの。

我が町の路地は自転車同士のすれ違いも儘ならぬ幅でドブ板のある「ザ・下町」。見渡す限り木造平屋、瓦屋根は金持ちです。母が夕餉の支度をする時、不足の物の買い足しは低学年の私の役目。お店は路地が途切れた空き地の先にあり、ここは子供達の間で「戦争中に死体を焼いた場所」と恐れられていた。

この日も早歩きで抜けようとしたその時、出た！「人魂」です。足はクルクルと空回り、何とか路地へ辿り着き帰宅。置いてきぼりにされた弟も泣きながら無事帰宅。子供の頃の路地暮しの思い出です。

林道と路地

福岡 宮田千恵子

路地とは家と家との間の狭い道、路地裏長屋、横丁などいろいろある。この狭い路地を抜けると、明るい賑やかな街に出るとか、未来を想像した。

私は、長屋には人と人との息遣いが聞こえるような温かいイメージを持っている。

私の育った町は炭鉱で栄えた町で、炭鉱長屋が多くあり、我が家はそこから一時間半程離れた山奥にあった。林道しかない石ころだらけの山道、雨が降ると大変だった。道の両側を木が覆い、昼間なお薄暗く、子供の頃は怖くて通れなかった。通学は田の畦道、外灯などもちろんなく往復徒歩。長屋に住んでいた友達が羨ましかった。現在は療養型病院が二か所出来、道は舗装され、林道は拡幅され、少し賑やかになった。

石灯籠と路地

金沢 廣田宏美

御縁あつて寺に嫁いでまいりました。

広くもない路地に石灯籠が十五基、築山には大きな灯籠が鎮座しています。余りの多さに啞然と致しました。曾祖父様の好みらしく何方も口出しならずです。

そこからが私の手伝いの始まりです。植木鉢の五十余と花木の水遣り、草むしり、手水鉢の水替え、池の水替えと大変です。以前から伽羅楓、石躑躅、擬宝珠、皐があり、また四季折々の花に息吹を戴き、長生きさせて貰っております。

火袋の窓の障子の張替えをします。ゆつくりと盆のお座敷でお客様をもてなすのです。石灯籠一基一基に蠟燭の火を灯せば、障子明りが揺らぎ、なかなか風情があります。心安らぐ路地のある住まいです。

「万象ノオト」投稿募集

▽3月号「城下町」(11月末日締切)

▽4月号「宝物」(12月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

巻頭作家（十月号）プロフィール



こいけ 清晴
(東京)

この事が、大きな転機となり、小池さんは俳句に没頭していく。

平成30年8月号に、次の三句が。
風光のカヌーの水脈の煌めきて
鈴懸の斑入りの幹や風光る
倒れても歩く二歳児芝青む

持ち前のチャレンジ精神と努力が急速に花開くのは、今年に入ってからだ。
令和4年5月号の「万象作品の佳句」に三句選で登場。

ぎいぎいと揺る小舟に群る鴨
省略の効いた一句（後略）。――

（佳句選評、二句目）

昭和29年、江戸川区平井に生まれ、平井で育つ。早稲田大学卒業後、社会人の前半は海運会社、後半は外資系のスポーツ用品メーカーに勤務。
平成28年、隣に住んでいる松井宜夫さん（「万象」会員）に誘われ小松川句会に入会した。同年に「万象」入会。巻頭までの小池さんの進境を振り返りたい。

平成29年

あちこちに生まれし空地姫女苑

この句を「毎日俳壇」へ投句したところ、選者・小川軽舟氏に採られた。

た写生の句となった――。

（佳句選評、一句目）

続いて令和4年8月号にも四句。
学食のレタスはみ出すハムサンド
春筍をくるむ新聞しつとりと
側溝の薄き土より諸葛菜
木の芽時宿屋の屋根を走る猿
――ひなびた宿屋の屋根の上で何やら物音がする。猿の走る足音だとわかり、体験して初めてできあがる眼前写生の句だ。――

（佳句選評、四句目）

そして10月号で、次の四句が巻頭を飾った。

新しき白亜の校舎梅雨明くる
青葉風公園の森深くなり
園丁の籠にあふるる花菖蒲
濃紫陽花小さき雨靴駆け抜くる

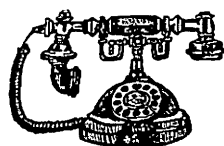
付け加えれば、6年前小松川句会に、颯爽と現れた彼は、PC・エクセルの優れた技能により、句会の事務作業の進行を格段に向上させた。

俳句はもちろん、様々な場での今後の活躍が期待される。

（広瀬俊雄）

万象作品

江見悦子選



夏落葉風のかけらとなりにつけり
福岡 宮田千恵子

大海にとろりと吞まる大夕焼

青大将風向きをよむ長き舌

夏旺んロビーにゴッホピカソの絵

小松島 岡田あゆみ

石室の奥の漆黒梅雨湿り

岩屋まで粗き石段鴨足草

菓子箱に仕舞ふ自慢の兜虫

焼茄子の掬よんどころ無き姿かな
西海 山下敦子

海面に無数の穴や大夕立

わつとくる草の匂ひや敗戦日

隙間なく青をならべて今朝の秋

りうりうと動噴回り空高し
焼津 小梁洋子

窓に椅子寄せて一人の遠花火

風鈴鳴る風小をどりに垣こえて

黙黙と鶴折る指や八月来

秋あかね被爆の川をのほりけり
敦賀 為永香月枝

拉致ありし小浜海岸夾竹桃

一村の集ふ古城址祭笛

初秋の旅の都合ひや翁の碑

新盆の俳師を偲ぶ旅にあり

葛の花碑のみの城の趾

松戸

野田成夫

若き日の葉そのまま曝書かな

尺取虫の井戸桶計るつもりらし

逃ぐる背に水鉄砲の集中す

文楽の人形操る夏袴

東京

中澤桃子

小刻みに神輿飾りの揺れをりぬ

炎天を来て炎天へ宅配人

白き椅子並ぶ庭先避暑の宿

蹲をたたきて太き夕立来る

津

瀬野喜代子

夏負けて憶良の歌をひろひ読む

月赤しとぎれとぎれに蟬のこえ

黙しゐる人々哭けり終戦日

項垂れてねこ押す人夫油照

東京

三村紀子

炎昼や舗装し立ての黒光り

本降りのビートのうねり蓮の池

縁起画の裏に干涸ぶ子かうもり

悉くひと雨欲しげなり四葩

金沢

道場啓子

夕さりのみどり弥増す青田波

稲の花有るか無きかの風摺み

稲の花見るとき呼吸忘れたり

百年の楡の大樹に蔓紫陽花

札幌

石田

睦

姫女苑舗装道路の路肩より

雉鳩の声に目覚めり夏の朝

ラベンダー摘む子らの声ひつじ雲

佐々木 茂

稜線の鋭しちんぐるま足下に

熊避けの鈴鳴らす路花さびた

秘密基地いとこ集まる蚊帳の中

島崎 洋

向日葵の高さや初の逆上がり

茅の輪くぐる希望の門と思ひつつ

万緑に呑み込まれたる信号機

園田鶴子

藤蔓の自由奔放風を巻く

雷鳴に駆け寄る仔馬震へをり

虫の夜の深夜ラジオにささやかる

高山哲英

一斉に空向く体操鴨来る

秋霖や画鋏錆ふく曼荼羅図

紫陽花やこんな近くに美容室

竹重富子

灰鷹の子の声盛ん夏の森

朝顔や駅のホームの雨あがり

夏雲や幸せ握り生まれし子

谷 廣司

握る手に硬貨の匂ひ祭の子

朝風の肌擦る氣配夏の果

花火見る家族のそろふ里帰り

札幌

船橋明美

はや一年近くて遠き盆供養

採り立ての野菜で一杯夕涼み

校舎借り夜間中学夏夕べ

吉田克己

光より音やや遅れ遠花火

土用鰻声変りせし孫と食ふ

遠花火祖母の待つ家一里先

江別

太田佳美

兵児帯に祭団扇の留学生

彼方まで歩けさうなる大雲海

庭先の小さき鉢に梅雨茸

新庄

曾野部礼子

踵冷ゆ擬宝珠に道塞がれて

掃除機に床ギシギシと梅雨湿り

塗り替へし白壁まぶし額の花

東根

門脇好子

工事場のクレーン伸びて街酷暑

青田風吹き抜けて行く地藏堂

合歓咲いて空新しき真昼かな

大江

安藤桂花

一瞬の雨止み栗の花にほふ

抱けば子の頬の笑窪や夏に入る

ちんまりと正座の母の盆支度

新潟

榊原キヨ子

盆支度朝風清き仏の間

初秋や朝な朝なに干物焼く

初秋や妻の好みに模様替へ

新潟

齋藤 信

夜半の秋臥せたる伯母の息細き

番号で呼ばるる患者秋の雲

凌霄に朝風やさし散歩道

斎藤ヨシ

湯上がりの逃げ出す早さ裸つ子

月見草町一望の村の墓所

幼子と茅の輪を潜る妊婦かな

佐藤幸示

八百年超えたる蓮の紅ほのか

風鈴の千の音の中神詣で

朝採りの茄子漬祖母の馳走かな

佐藤シズエ

組板に反りたる鰯にふり塩す

老鷺の声静まりて暮れにけり

涼風に作務衣の衿をゆるめけり

燕

渡辺志ま

もどり梅雨尽きることなき無駄話

孟蘭盆会むかしながらの菓子供へ

落雷に長き停電夕餉どき

芳賀

稲川清子

ボランティア終へてもらへり初茄子

長電話アイスクリームとろけたり

夕風に音磨かれて鉄風鈴 芳賀 福武幸子

滝壺を出て水音の力抜け

梅干して三日三晩の仕事終ふ

庭木越えどこまで伸ぶる藤の蔓 鹿沼 渡辺利子

草の丈伸び切つてゐる花野かな

白鷺の頸の横切る青田道

明烏こだまの返る夏の空 栃木 飯塚キミ

みんなのひときは高き軒の下

遠雷や里芋の葉の揺れ始む

庭先に新聞広ぐ籐寝椅子 佐野 木村君子

買物は盆のセツトとマスクかな

行き付けの激辛カレー溽暑の日

五十年の家に短き軒簾 黒川しげ子

梅干を裏返す指紫蘇色に

冬瓜に出し汁しむる夕餉かな

老鶯の声の近くや朝の庭 齋藤ミチ子

人丸社奥の暗きに蟬時雨

弁天に江戸風鈴の響きけり

万緑や静けさの中芭蕉句碑 関口かつ子

朝の日を飛ぶ白鷺の眩しさよ

柿青む雨上がりの朝深呼吸

境内へ沢水幽か濃紫陽花 佐野 店網洋子

夏空や高校球児の真白き齒

水しぶき鉢よりぴよんと青蛙

父と子の七夕竹を担ぎくる 仲山さよ子

兩岸の切絵灯籠巴波川 うすまがわ

空映る池塘にじつと山椒魚

ダンサーの気迫のボレロ真夏の夜 菰原美穂子

谷風に吹かれてゐたるさるをがせ

虫籠を子は肩に掛け美術館 義本美智江

リモコンで空中撒布青田原

鰐口の鈍き音せり夏木立

境内の風鈴捉ふ草の蔓 つば 藤原善明

コロナ禍の鈍き音のみ遠花火

避暑の地に猿の格闘熱きかな

片蔭に信号待ちの野猿かな 志木 汐見克彦

川涼し中洲に釣りの子等の声

えのこ草舗道の罅に種こぼす

万緑の岩山背負ふ禅の寺

水替へて金魚の尾びれ生き返る 和光 板垣陽子

バス停に友の日傘の待ちてをり
蟬しぐれ父母の声よみがへる

列島を原始の森へ戻り梅雨

新座

多田英治

猛暑日の鼓動高鳴る救急車

入道雲逆転逆転甲子園

高麗の里竹の器の夏料理

川越

岡野輝子

真つ直ぐに蟻の引きずる蟬の翅

髪束ね炎暑の町に踏み出せり

黙禱の鐘を身ぬちに原爆忌

千葉

大月玲子

朝まだき風たひらかに白秋来

嫌はれて貧乏蔓花盛り

百一歳猛暑の中を淡々と

喜多恭仁子

七十七年涸れぬ涙や広島忌

秋立つや今朝の紅茶はダージリン

片蔭の尽きて話の止みにけり

高田みや子

孟蘭盆や隣る人あるこの三日

ワクチンの微熱の床や法師蟬

産土神に柏手響く夏落葉

酒々井

小林あけみ

宮出しの声の上がりし神輿立つ

お囃子の近づく佃堀涼し

勝手より水の香ほのか夜の秋

佐倉

新谷八郎

夜濯のひとしほ重き野良着かな

ジョギングの復路は雨に蟬しぐれ

雷や塀に喰ひ込む根の曲り

交番に婦人警官虹立てり

城址に蟬のなきがらおびただし

青空に青田の波の止めどなく

国技館団扇の揺れの其処かしこ

台所目立つところにメロン置く

漫ろゆく汀に揺るる夜涼の灯

荒梅雨や暗渠にあふれ水の音

真贋はさておき古書の徴払ふ

奈良井宿にともる提灯夕薄暑

跳箱の着地決まりて梅雨明くる

手話の手が声を発する原爆忌

ゆらゆらと蕾立ち上ぐ月下美人

軽鴨や株間の水に親子連れ

軽鴨の新穂目当てに飛び跳ぬる

朝採りの産毛の光るオクラかな

履きなれし三越の靴けさの露

有泉正夫

杉田富美代

鈴木隆久

鈴木美根子

立原千代子

米田敏子

砂丘ゆく女の素足小麦色

大櫓おほたぐさの日を受け止むる暑さかな

船橋

入河 大

色褪せし翅畳みたり黄金虫

電柱より鳥の吐き出す声暑し

夏椿落花の音を聞きもらす

槐島 修

夏空に怪獣の雲湧き立てり

片かげり行き交ふ人に譲りけり

油蟬生きる証の鳴きつぶり

山口秀吉

「遺族の家」残る藁屋や敗戦忌

カーバイドの祭のほひ懐かしき

柏

鹿毛満子

髪切りし後の涼しき軽さかな

籠枕ほほに編目の跡残す

村田由美子

寺守の台車よろける日の盛

蟬時雨三十年の櫓かな

村田由美子

すれ違ふ同級生や夜店の灯

汗の子の眼は母へ乳ふふむ

炎昼や少年バツター黒づくめ

松戸

石川幸子

ふりむきし蜥蜴や長き髦いしたみ

落蟬の腹仰向けてしづかなる

菊岡緋路

大滝の膨らみ弾け落ちにけり

夕さりてはまち雨止む虹二重

花南天手折れば音のしたりけり

夏落葉地底にひびく水の音

松戸

渡部洋子

白百合を瓶に女子会賑はへり

影残し樹間に消ゆる黒揚羽

浜万年青ニライカナイの海はるか

市川

奥澤よし江

厨から音の始まる今朝の秋

手枕にかなかなの声届きけり

まはり道して蟬しぐれ浴びにけり

東京

安藤美酒々

秋立つやきりと白き割烹着

水やりは鼻唄交りあさがほへ

亡き母の金縁めがね拭く晩夏

石井登女

河童忌や大気不安の空模様

船上のプールに映る雲の峰

涼風や箱根の写真なつかしむ

石山風童

深水の筆の団扇を湯上がり

武器は愛灯籠流す広島忌

お祭の賑はふ屋台子等の声

大場八朗

空梅雨や道に水まく妻若き

梅雨晴や西へ流るる白き雲

佳き事のありて良き音軒風鈴

東京

北口富栄

裏門は今が盛りと灸花

古里の厨はひろし青田風
落日のなほ燦々と灼けてをり

東京

平子甲奈

劇場を出でて日比谷の夏の月

四十度の夏空蒼しロンドンシティ

立て掛けし鬼灯点る土間の壁

小池清晴

寝苦しや真つ赤なブラム鬻りたる

凌霄の花寄り添うて無縁墓

本多

昼の青残れる空や月涼し

本多 葵

向日葵や吾を見てゐる五千本

齊藤孝夫

夏瘦の雀と憩ふ木陰かな

橋脚に流木渦巻く梅雨出水

齊藤孝夫

日の入りの僅かに早し今日の秋

停電のオペラハウスに夏の霜

齊藤孝夫

生身魂見知らぬ人に握手され

軒先にバス待つ杖と夏帽子

高野翠子

夏薊絮毛を付けて空を舞ふ

大暑かなガラス戸大きクレープ屋

高野翠子

縁台の父と子の黙夕涼み

チャイム音この世に戻る昼寢覚

高野翠子

遠き日の潮風入るる昼寢覚

白桃のするりと剥けてガラス皿

田崎京子

木道の陰の一叢水芭蕉

体操の出席カード緋のカンナ

田崎京子

風もなくワイン片手に夕端居

酒と肴届くりモート暑氣払

田崎京子

蚊遣香流るる堂に夕迫る

木道の暮れなんとすや時鳥

長谷川信也

タイマーをセットしばしの三尺寝

睡蓮の間に揺れたる空の青

長谷川信也

高尾山裾に二枚の青田かな

起震車に弄ばるる梅雨晴間

長谷川信也

毬のごと小さき実揺るる百日紅

尺蠖の葉裏に動く空の青

馬場美智子

夏の富士茜色なるシルエット

鉢物に水遣りてをり大西日

馬場美智子

何するでなく一日終へ酷暑かな

府中

竹村晃子

稲光多摩川べりの青白き

草むらに思ひのまゝの灸花

届きたる誕生祝ひのクレマチス

国分寺

中ノあき子

鉄線花古池の辺を明るうす

白線を刷く青空に小鳥来る

敗戦忌蔵で産声あげし吾

日野

松原悦子

掃苔や母の十八番を唄ひつつ

立山の水に浸せる新豆腐

母の忌の蟬の一日鳴く日かな

渡辺八枝子

爆音に夕焼の帯ほどけたり

お布施にとおもたき西瓜抱へ来る

日の翳り日傘忘れしバスの中

青梅

横井一美

愛らしく金魚が泳ぐ金玉糖

雨音と蛸の声混ざり合ふ

方丈の屋根にどつかり雲の峰

横浜

阿部トキ

空き家の庭しばし彩る百日紅

樟大樹走り根太く土用の芽

藻の花の撒かるるやうや池静か

知らぬ間に咲きて散りたる夏椿

挽ぎたての曲り胡瓜の箸休め

大駒泰子

人逝きて雉鳩鳴きぬ夏の果

横浜

岡 元枝

夜の秋少し窓開け眠りたり

初花の芙蓉の一つ朝の庭

餌ねだる子鴉宥む親鴉

加藤和子

大社行きの電車に乘れり夏の蝶

諏訪湖畔土産に出来たて鰻めし

夾竹桃咲きし荒れ庭シヨベルカー

坂本具子

高速道七夕飾る料金所

SLの汽笛の大き夏の果

蛇の子の地面をこすり草叢に

建て替へのブロック積まれ山椒の芽

柿若葉受付を待つ理髪店

柴田雅春

外灯へ一直線にかなぶんぶん

日盛や腹這ふ小犬小屋の陰

朝市に大き刀豆一掴み

紫陽花の窓より仰ぐ雲低し

土蜘蛛の巣を高々と幼き日

師の庭にふくらむ風船葛かな

故郷の山へ向かふや夏帽子

神なびや祝詞漏れ来る木下闇

長野高朋

富田 要

鈴木律子

里山の灯微かや走り梅雨
北窓に音伝ひ来て遠花火

横浜

三木豊子

その次へ少し間を置き揚花火
秋の蚊の耳元に来てよろよと

新糠の香る茄子漬濃紫

豊美佐子

島人の見送る波止場夏帽子

玫瑰の香り微かに浜の風

曲り角片蔭の道選びけり

川崎

青木明代

今は亡き簾椅子の父懐かしむ

今日気分よき日曜日髪洗ふ

命日の曖昧となり墓洗ふ

横山ユキ子

お施餓鬼の僧総立ちの散華かな

寛解の夫に祝ひのメロン切る

投票日音たてひらく古日傘

茅ヶ崎

久保田富士子

パソコンは迷路となりぬ迷ひ蟻

真夜の庭梔子の香の広ごりぬ

河童忌や浅瀬に白きさざれ石

大和

中谷由郁

ピアソラの音のころがる夏嵐

夕暮れて影絵となれる渡り鳥

ただ独り何やら寂し盆の月

伊勢原

本島 廣

八月の月光に浮く手摺影
新秋の雲間に覗く細き月

階上る下駄音たてて白日傘

伊勢原

山本カツ子

笹竹や腰柔らかに藍浴衣

手甲を跳ぬる泥水草を引く

棚経は声のびやかにロック調

松田

古谷悠紀子

助太刀の大見得を切る夏芝居

首筋に日差しの痛さ梅雨明くる

甲斐駒ヶ岳の屏風となりて雲の峰

甲府

江口嘉郎

窓を開け貝風鈴の音入るる

羅をまとひて母の華やぎし

糸蜻蛉青と赤来て沼平ら

静岡

伊東文恵

夏深し沼の土手なる遊び蔓

蜘蛛の罫に沼辺の道の遮られ

分け入りて夏草の香に包まるる

汗したたる道路工夫の顎紐に

球児らの深き一礼夏終る

石楠花や貝殻出づる行者径

棟上げの棟梁の槌風薫る

堀切に栗の花散る山の城

杉田義則

杉澤 修

川とんぼ朝の光に生まれけり

静岡

杉山紀美子

マニキュアを真つ赤に塗つて暑に耐ふる

忠魂碑に空蟬の背の艶めけり

風涼し大杉下の神楽殿

獣らの食みし跡あり梅雨菌

巖頭に地蔵並ぶや苔清水

大西日門柱の鋏褪せにけり

蟬の音へ城門の窓閉ぢらるる

海の日や日の丸掲ぐ報徳社

蓮の葉に雨粒ころころ音立てて

畑に撒く大鋸屑出づる兜虫

唐黍畑大音量のラジオかな

父の日や父と地酒を重ねたる

仁王門潜れば蓮の花香る

楼門の木目浮きたる油照

白蓮の朝の光の白さかな

駒鳥の声に誘はれ山頂へ

製材所包みてをりぬ蟬時雨

遅れくる音に花火の夜空あり

雨音に眠りの深き金魚かな

高橋一夫

田中秀幸

筑地裕子

内藤允昭

永田公香

長谷川秀子

蟬の声止みたる時の波の音

朝の日に光る白さや水葵

黄金虫の足元に落つ沼の朝

夏燕河口の水面打つてをり

とんばうや腹曲げ命連ねたる

銀やんま光る湖面を引き裂いて

迎火をせむと爺抱く金盥

兜虫捕り幼き日よみがへる

一列のツーリング行く雲の峰

甘酒を老いたる母と啜りけり

亡き人の誰彼こひし盆の月

金沢

白村喜久代

青葉照る待合室の窓辺かな

錠剤のひとつぶふえし青葉冷

手に取れる初茄子の紺光りをり

白南風に背を押されつつ友来る

緑蔭の続く散歩に背を伸ばす

採りたてや口に弾けるプチトマト

百発の花火並列して空へ

梅雨満月叢雲抜けて中天に

雨粒の光を放つ仏桑花

静岡

矢野喜久江

渡辺寿恵

嵐山

鈴木裕一

北野陽子

新出祐子

田上ナツ子

古代蓮水の濁りに紅一片

金沢

廣田宏美

見落しの葉蔭に絡む太胡瓜

金沢

廣田宏美

桜の実散り敷く山の池めぐる

金沢

廣田宏美

一刷けの雲おく白山麦を刈る

金沢

廣田宏美

暮れかかる廃校の庭蟬しぐれ

金沢

廣田宏美

朝風やパラグライダー高々と

金沢

廣田宏美

大輪の蓮ひとひらふうはりと

金沢

廣田宏美

入道雲人影動く浚渫船

金沢

廣田宏美

箸を取り鰻うましとドイツの子

金沢

廣田宏美

県境の並木のいちやう黄ばみ初む

金沢

廣田宏美

谷町の外科医へ通ふ浴衣掛け

金沢

廣田宏美

夕さりの破風に寄り添ふ蛇の衣

金沢

廣田宏美

丁字草風にゆれつつ溢れたる

金沢

廣田宏美

岩清水ひんやり喉の鼓動かな

金沢

廣田宏美

少年の声弾けたり山開き

金沢

廣田宏美

子と二人茅の輪をくぐり安らげり

金沢

廣田宏美

夏真昼動かぬ鷺の大欠伸

金沢

廣田宏美

炎昼や海人老いて網を干す

金沢

廣田宏美

夏薊父祖の守りし参り墓

金沢

廣田宏美

はぐる蜻蛉水際低く対なせり

敦賀

山本一枝

こほろぎの住処残して畑仕事

敦賀

山本一枝

飛魚や銀の鱗の三段跳び

敦賀

山本一枝

月山に雲起ち上がる夏薊

敦賀

山本一枝

草矢射る故郷の川滔滔と

敦賀

山本一枝

明易し雲海を切る槍ヶ岳

敦賀

山本一枝

陽光の一太刀に薔薇目覚めけり

徳島

池田やすし

遍路笠ふと歩み止めストレッチ

徳島

池田やすし

蛙らの声は闇夜を支配せり

徳島

池田やすし

まくなぎを払ひつ社殿拝みけり

徳島

池田やすし

夏至の風おのころ島の大鳥居

徳島

池田やすし

夏ぐれや見上ぐる鳥居朱に光る

徳島

池田やすし

初蟬やベートーベンを聴く如く

徳島

池田やすし

戻り梅雨拭き残したる曇り窓

徳島

池田やすし

短夜の主婦に二度寝は許されず

徳島

池田やすし

日本けふ危険な暑さジャムを炊く

徳島

池田やすし

ひよいひよいと飛石伝ふ跣足の子

徳島

池田やすし

炎昼や献花の列の続きたる

徳島

池田やすし

水音の響く豆腐屋朝焼雲

小松島

池田やすし

夏うぐひす息絶え絶えに鳴いてをり

小松島

池田やすし

的屋の子奥に寝てゐる夜店かな
 校庭の塀まがるまで蟬時雨 福岡 相本和子
 有線の手スキーパーボイス行水す
 夏深し蔭をつたひて息をつぐ
 涼風や三番ホームに深呼吸吸
 炎天下猿山うごく気配なし
 樹々の名を言ひ合ひながら夏の山
 背振嶺の風吹き渡る青田かな
 風に乗り黄鵠の声幾度も
 まんまる眼カメラに光る青葉木菟
 包丁の力加減や桃を剝く 那珂川 高山ひさ子
 蜘蛛の罠に朱き花びら震へをり
 風鈴を七つ吊して山暮し

園田清子

鶴田輝代

高山ひさ子

万象基金のご報告

下見直哉様

一〇〇

三村紀子様

一〇〇

(令和4年8月16日〜9月24日・受付順)
 「万象」の発展のため、大切に使用させていただきます。

万象俳句会

毎月25日発売
 定価1000円(税込)

月刊俳句界 2022年11月号

特集

感銘句ヒストリー

「初学の頃、転機の時、現在の三つの時期に分け、その時に感銘をうけた句を紹介！」

遠山陽子 鈴木しげを 淵脇護
 本井英 水田むつみ 角谷昌子
 井上康明 辻村麻乃 関悦史

特別作品21句

大竹多可志

タラピン 俳句界NOW 稲畑廣太郎

人称代名詞の効果

○人称別、俳句セレクション

(一人称)佐藤成之 (二人称)黒澤麻生子
 (三人称)高勢祥子

○論考「作品における人称代名詞」

山田耕司 岡田一実

○自句自解

(二人称)依田善朗 浦川聡子
 (三人称)木暮陶句郎 藤井あかり

(三人称)山下知津子 黒岩徳将
 ＊セレクション結社「玉梓」名村早智子

私の一冊 今村潤子「火神」



対談 佐高信の甘口でコンニチハ！
 江成常夫 (カメラマン)

「俳句界」投稿欄

一流進者14名！
 日本一充実の俳句欄

※一部変更の可能性あります。



株式会社文学の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
 TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

俳句カレンダー掲載句観賞

俳人協会発行の11月の「俳句カレンダー」に句が掲載された石田野武男さんは、残念ながら昨年12月に逝去されましたので、今回は句会で指導を受けてこられた倉谷ます美さんに掲載句を鑑賞していただきました。

胸に吊る泥のクルスや蓮根掘る

石田野武男

蓮根は晩秋から冬にかけて旬をむかえ、マーケットの店頭に並ぶ。全国の生産量の約半分を占める茨城県を筆頭に、日本の各地で生産されているが、掲句の舞台となった長崎県天草などでも蓮根栽培を生業とする人達が多いようだ。

また、この地域は2018年に隠れキリシタンの地として、世界遺産となっている。

石田先生のこの句は、作業をする人の胸に「泥のクルス」が吊るされている、と提示する。「クルス」はポルトガル語で十字架を意味する。隠れキリシタンの末裔かと思われる。

しかも、季語「蓮根掘り」は、冬の最中泥田を足で探り廻り、体は芯まで冷える厳しい仕事である。

あくまで「蓮根掘り」の写生句だが、厳しい冬の作業と隠れキリシタンの過酷な歴史が重なりあい、様々に思いを巡らせてしまうのである。

(倉谷ます美)



引きつづき俳句に使われる難読漢字を勉強します。今回は再び冬の句からあれこれ拾ってみました。それぞれの句の傍線部の漢字を正しく読んでみましょう。

- | | | |
|----|----------------|--------|
| 1 | 飲食のうとましきまで時雨月 | 長谷川久々子 |
| 2 | 雀の斑少し濃くなり十一月 | 遠藤由樹子 |
| 3 | 辻神の供米へ比叡風かな | 鈴木鷹夫 |
| 4 | 翠黛の時雨いよいよはなやかに | 高野素十 |
| 5 | 水晶を包む天鵲絨山眠る | 朝吹秀和 |
| 6 | 年木売櫛子に馬をつなぎけり | 中村草田男 |
| 7 | 宮狭子のなかをいぶかる七五三 | 中原道夫 |
| 8 | 大熊手荒稲こぼさぬやうに持ち | 和田順子 |
| 9 | 日本語の乙張しんと一葉忌 | 川崎展宏 |
| 10 | 眺に乱るる日差し鴨の湖 | 正木ゆう子 |
| 11 | 文旦にうるはしき臍ありにけり | 片山由美子 |
| 12 | 真直ぐに行けと冬芽の挙りけり | 金箱戈止夫 |

【正解】

- | | | | | | |
|----|------|----|------|----|------|
| 1 | おんじき | 2 | ふ | 3 | くまい |
| 4 | すいたい | 5 | ピロード | 6 | れんじ |
| 7 | はこせこ | 8 | あらしね | 9 | めりはり |
| 10 | まなじり | 11 | ほぞ | 12 | こぞり |

(*解答はすべて口語表記になっています。)

万象作品の佳句

江見悦子

青大将風向きをよむ長き舌 宮田千恵子

青大将は、日本産では最大の無毒の蛇、2メートルにも及ぶものを見かけることもある。鼠を捕食するので昔から土蔵の守り神とも言われ、人とは近い関係だ。嗅覚が発達し、獲物を狙う時など、先端が二分した長い舌を出し入れさせる。空気の振動や流れ、温度差を感じ取ることも出来るという。掲句はその舌の動きを「風向きをよむ」と捉えた。世の中のならゆきを窺っているような、人間臭い青大将の姿が面白い。作者は福岡の人。

菓子箱に仕舞ふ自慢の兜虫 岡田あゆみ

捕ったばかりの兜虫を大事に菓子箱に仕舞っているのは、小学生の男の子。朝早く起きて櫟の木に兜虫を見つけたのは、夏休みの楽しみの一つだ。「自慢の」に、得意げな子供の様子がわかる。この後、兜虫を箱の中で生かし続けることが出来するように。作者は小松島の人。

りうりうと動噴回り空高し 山下敦子

「動噴」という言葉を初めて知ったが、動力噴霧器のこと、農薬撒布などに使われるもの。作者の住む地域では季節

季節に動噴が活躍するのだろう。リモコン操作で動くそれが、回りながら撒布しているさまを「りうりうと」と詠んだ。「空高し」の季語が生きた、勢いのある面白い句材の句となつた。作者は西海の人。

秋あかね被爆の川をのぼりけり 小梁洋子

この句の「被爆の川」とは、広島県の元安川を指すのだろう。広島に原爆が落とされ爆心地となった地点は、市を貫流する太田川と元安川の分岐点に架かる相生橋。被爆から77年経った今でも、元安川からは原爆ドームの崩れた壁や、被爆者の方々の遺品が引き上げられる。その川を秋あかねが上流へ上流へと飛んでいく。抑えた表現に、鎮魂の思いが籠もる。作者は焼津の人。

新盆の俳師を偲ぶ旅にあり 為永香月枝

「俳師」とは、昨年十二月に亡くなられた敦賀の石田野武男さんのこと。作者の為永さんとお話したところ、亡くなる二日前の句会では冗談を飛ばされて大変お元氣だったという新盆に当たって「旅にあり」に、しみじみとした思いが感じられる。作者は敦賀の人。

若き日の槩そのまま曝書かな 野田成夫

土用の晴天の日、微や虫の害を防ぐために書籍を陰干しにすることが季語の「曝書」。書棚から出して並べていた作者が手に取った本には葉がはさまったまま。若い時に読んだものだったか、懐かしくて思わずページを繰る。動詞を使わず、省略の効いた句となつた。作者は松戸の人。

炎天を来て 炎天へ宅配人 中澤 桃子

氣象庁檢討会によると、この夏の記録的な暑さは「異常氣象」とか。コロナ禍も加わりしのぎにくい日々となった。外出できない生活を支えたのが宅配。お中元、お盆と、贈答品の遣り取りが増えるところに食品配達も加わって、宅配人の労働も過重に。炎天の下を荷物を届ける姿が目立った。今年の夏のひと餉を詠んだ社会性のある句。作者は東京の人。

夏負けて憶良の歌をひろひ読む 瀬野喜代子

作者は夏の暑さにいささかばて気味。そんな時に『万葉集』を取り出して山上憶良の歌をあれこれと拾い読みする。憶良と言えば、子に対する愛情や、民の生活の苦しさを詠んだ「貧窮問答歌」などが思い浮かぶ。恋愛や花鳥風月とは無縁の問題意識を持った作品が特徴的だ。作者は津の人。

縁起画の裏に干涸ぶ子かうもり 三村 紀子

縁起画は古い絵馬堂にでも掲げられているのか、作者は板製の画の裏側に、小さな蝙蝠の子が貼り付いて干からびているのを見つけた。餌を貰えず、飛ぶことも出来ずに命が尽きてしまったのか、縁起画の裏だからこそ、哀れさがつのる。眼前に見なければ作れない珍しい句。作者は東京の人。

稲の花有るか無きかの風摺み 道場 啓子

稲の花は花ともいえないような短命の花。青い穂が出てくる頃、一つ一つの穂がてんでに割れ雄蕊と雌蕊が受粉する。

花が咲くのは90分ほどの間。その花がはらはらとこぼれる様子を「有るか無きかの風摺み」と表現した。作者は金沢の人。

以下は三句選の作品から。

抱けば子の頬の笑窪や夏に入る 安藤 桂花

上五の「抱けば子の」から中七の「頬の笑窪や」と続くリズムが快い。幼い子の頬の笑窪の柔らかさが瑞々しい。夏が始まる明るさが良い。作者は大江の人。

厨から音の始まる今朝の秋 奥澤よし江

台所から朝食を用意する音が聞こえる。いつもと変わらぬ朝だが、なるほど秋はこの音から始まるのだ、と納得させられる句。日常の中に詩を発見している。作者は市川の人。

停電のオペラハウスに夏の霜 齊藤 孝夫

「夏の霜」は、夏の夜に月光が地面を白く照らすのを霜に見立てた季語。白楽天の詩による。折からの停電に、オペラハウスの前庭が月光に照らされて白々としている。異界に紛れ込んだような幻想的な情景を詠んだ。作者は東京の人。

夏薊父祖の守りし参り墓 中村 優

「参り墓」とは、死者を埋葬した墓とは別に、少し離れた場所に供養のために建てる石塔のこと。古い参り墓の前に、父祖の存在に思いを馳せている作者。鮮やかな夏薊との取合せが成功した。作者は敦賀の人。

北から南から

中山純子先生を偲ぶ

あかね・白菊句会

金沢

中條睦子

中山純子師が亡くなられ今年で八年になる。7月にできなかった「純子忌」を、江見悦子主宰をお迎えし、10月6日（木）20名が集い、西光寺に於いて執り行つた。この朝切り取ったばかりの白の大輪のダリアが供えられた純子師の遺影を前に、一同黙祷をして「偲ぶ会」が始まった。

6名の同人がそれぞれ選んだ純子の一句を鑑賞、遺影の前で語りかけるように朗読した。

木の实一つ僧となる子の冬机

（瓔珞）

机の上の木の実が僧となる子の一抹の寂しさを感じさせ、季語の立ち上がる凛とした格調の一句に感銘。

豊田 高子

極楽の色かとおもひ時雨虹

（瓔珞）

西方浄土の色かと思うの比喩が、濃く弧を描き美しい時雨虹を、一層際立たせている。

伊藤美音子

立春のまだ垂れつけぬ白だんご

（沙羅）

まだ寒さは厳しいが、ようやく春になった安堵感と、清らかに満ちている。

塩井 志津

元旦のひよどりならば挨拶す

（瓔珞）

元旦であれば常の鴨にも挨拶するという。この鴨は森羅万象の象徴。お正月を寿ぐ心と森羅万象への感謝と祈りが込められている。

成瀬真紀子

雨の日はコップを磨くたでの花

（瓔珞）

日常の何気ない事柄に添えられた、「たでの花」の季語に、先生の温かいお人柄が懐かしく思い出される。

高田たみ子

念仏のさまよひおつる雪解川

（沙羅）

三十年ほど前、叔父の書架よりふと手にしたのがこの一冊でした。その時に響いてきた句です。私の俳句に関わった原点ともいえる一句。

松井佐枝子

この後、今月の「俳句文学館・この一冊」で紹介された『金沢俳句散歩』（中山純子著）の一文を井村和子支部長が朗読して、一部を締めくくった。

二部は、事前投句のあった作品集の中から参加者全員の互選、披露で句会が始まった。

この日の句会はいつもと違って、江見主宰の選評を頂けるといふことで、皆、熱心に耳を傾けた。一句一句についての丁寧な選評は、とても新しい感覚で学ぶことが出来、有意義な時間であった。

江見悦子主宰 特選

- （天）田舎家を畳む相談蚯蚓鳴く 豊田 高子
（地）路地奥は寺の裏門小鳥来る 高田たみ子
（人）角曲がるまで見送られ月の客 中條 睦子



古九谷の深むらさきも雁の頃

細見綾子

県立美術館は、四季折々に展示が替わり、そのつど楽しめるが、さらに嬉しいのは古九谷の常設があること。

大皿や平鉢の、雄渾闊達な存在感は、何回足をはこんでも見飽きることがない。鳥獣草木の大胆な構図もすばらしいが、さらに惹かれるのは、絵付のきわだった鮮やかさである。ぼつてりした五彩の彩色は、ときに、重厚な油画を思わしめる。十年間、金沢に暮らしたことのある作者もまた、古九谷の美に幾たびか魅せられ、感動されたことだろう。

秋、雁は「雁渡し」の風にのって、北方からやってくる。雁渡る頃から、金沢は急に秋の深まりが駆け足になるのが常で、この句はそんな季節感が、ひらめきでもって巧みにとらえられた。

古九谷の深いむらさきが、目に見えぬ雁の列を呼んでいる。とイメージする作者の感性は、非凡。下五が、この句に古俳諧にも通じる、豊かな空間性をもたせている。典雅で格調高い一句。

中山純子著『金沢俳句散歩』より



北 南 西 東

消 息 等

内海良太名譽主宰、江見悦子主宰の句、
「風港」8月号に。

山ざくら咲き出し山を膨らます 良太

若緑山門小さき尼の寺 悦子

名譽主宰、主宰の句「くちら」8月号に。

雪加とぶ沼に光と声曳いて 良太

二の丸の森の底より牛蛙 悦子

主宰の句「たかな」8月号に。

百年の農家の三和土春の間 悦子

僚誌「梅樞」創刊二十周年を祝って、8

月号に名譽主宰の句。

幹叩き芽吹く梅樞はげませり 良太

梅樞の洞に生き生き葉ゆる 良太

福島せいぎ顧問の句、静岡新聞「四季の

森」で土肥明子氏が鑑賞。(8・12付)

芋殻売り芋殻知らぬと嘆きけり

麻の茎の皮をはいで干した芋殻(おが

ら)。麻は穢(けが)れを拭い去る植物と

されることから、清浄な火として迎え火や

送り火に使われるようになった。時期にな

ると盆用品を扱う市が立ち、芋殻を売る店

も出る。店主は売りものである芋殻のなん

たるかを知らずに買う人の多さを嘆く。今

では手軽にスーパーマーケットや通信販売
などでも手に入る芋殻。売り主から直接知
る機会は貴重となった。「なると」主宰。

編集長の句、「春耕」7月号「句集燦々」

で堀井より子氏が鑑賞。

六月の硝子小皿の薄荷飴

天候の不順な六月。温度の高い過ごしに

くい日が続く。清涼感のある硝子の小皿に

盛られた薄荷飴はその爽快感で迎りの雰

気まで一瞬に変えてくれる。第一句集名と

した作者の思いが託されている。

「澤」7月号の「窓 総合誌俳句鑑賞」

で前田貴美子さんの句を鑑賞。

新北風や熱きまま買ふ島豆腐

「俳句界」5月号の「特集沖繩の俳句」

より。

十月頃、沖縄では南東季節風に代わり、

大陸から北東の風が届くようになる。それ

が「新北風」で、本州で言う「風」に当た

る。湿気が薄れる中、水温はまだ高く海で

泳ぐこともでき、一年で最も心地良い季節

なのだそう。島豆腐は弾力と塩味に

加えて熱々であるのが魅力。本土復帰の際

には食品衛生法により冷蔵販売が求められ

たが、独自の食文化を守ろうと国に陳情し
た結果特例が認められたという。熱はまさ
しく力だ。袋の口を開じず熱々のまま店頭
に並ぶずつしりとした豆腐が、紺碧の海に
浮かぶ沖縄の島々と重なる。

「第7回 いわき海の俳句全国大会」事

前投句の受賞作品を紹介する。投句数は

一三四四句、選者は小澤實、村上喜代子、

渡辺誠一郎の三氏。

小澤 實 特選

砂を巻く怒濤や能登の春寒し今越みち子

小澤 實 入選

乳母車と春セーターと海風と荻野加壽子

地震鎮め海に揉み入る神輿かな 岩崎武士

月見草ビキニ被爆の蟹の庭 小梁洋子

つばくらめ海抜ゼロの蟹の路地 神田美穂子

村上喜代子 入選

遠富士を眺め昼餉の蕨狩 岩崎武士

*金沢の今越みち子さん、おめでとうござ
います。静岡の皆さん、好成績でした。

(報・江見悦子)

令和四年 「万象」全国俳句大会 作品集

ご挨拶

令和4年「万象」全国俳句大会作品募集にご参加をいただき、有難うございました。

この夏、コロナ感染者が全国的に急激に増加したことにより、10月に予定していた全国俳句大会を中止とせざるを得ず、3年続きの大会中止となってしまいました。誠に残念ですが、我々の安全、安心を確保するためにはやむを得ない事と考えての決断でした。

こうした中にあっても、「大会作品集」を編むことが出来たことは幸いでした。674句の応募作品について、受付、作品のデータ化と校正、印刷所とのやり取り等の作業全般に亘って、北海道支部のメンバーにご尽力頂きましたことに、深く感謝申し上げます。

全国各地の皆様にご直接お会いして、親しく言葉を交わすことは出来なくとも、俳句を通じてたくさんの方が溢れているこの作品集に勇気づけられます。コロナ禍の時代、俳句をやっている本当に良かった、という声を耳にするたびに、「俳句の力」「言葉の力」を思います。

これからも、「万象」誌でお会いできることを楽しみにしております。皆様の一層のご健吟を祈ります。

令和4年11月1日

万象俳句会主宰 江見悦子

大会作品集 目次

ご挨拶	江見悦子	2
内海良太名誉主宰選		3
江見悦子主宰	選	4
小林愛子名誉顧問選		5
中村千久	選	6
曾根 満	選	7
亀田やす子	選	8
吉中愛子	選	9
神田美穂子	選	10
前田貴美子	選	11
大木 茂	選	12
山本右近	選	13
中條睦子	選	14
倉谷ます美	選	15
作品集		16
担当支部よりのご挨拶	松原智津子	34

内海良太名譽主宰 選

- 61 萱の野に埋れアイヌの木の墓標 札幌松原智津子
 78 妣の紬ドレスに仕立て孟蘭盆会 江別太田佳美
 79 純子師を呼べど青嶺に笏なし 金沢伊藤美音子
 89 川岸につかる石段花いばら 横浜小板橋泰山
 126 お兄ちゃんと茂りの奥の秘密基地 札幌岡本敬子
 141 軸足は石狩の海虹立てり 札幌紅露恵子
 149 夜濯の野良着を踏むや外流し 横浜山崎郁子
 214 岩礁に髪を乾かす鮑海女 七尾谷渡末枝
 217 一斗罐で唐黍を焼く飛行場 札幌岡本敬子
 254 お試しの補聴器初蟬捉へけり 横浜大駒泰子
 312 つくつくし終章に入り転調す 静岡杉澤修
 320 赤蜻蛉ついと来水と光合ふ 金沢豊田高子
 388 蛇口から湯のほとばしる原爆忌 志木中村千久
 405 その先に海の見えたる茅の輪かな 福岡宮田千恵子
 438 村中の田水沸く香や父の里 南魚沼森山眺湖
 449 水口に足浸け憩ふ田草取 静岡藤原千代子
 474 産み月の腹の尖りや更衣 静岡藤原千代子
 514 初めての校正終へて生ビール 大阪入山繁幸
 537 わたつみの神威岬に星の橋 金沢井村和子
 550 バリバリと拡ぐからかさ秋暑し 東京草間三香子
 561 ゴツゴツと乾くジーンズ秋暑し 東京桑原優美子

- 587 帰省子に合はせ予約の美容院 四街道奥太雅
 607 千年を足利の藤つなぎたる 東京山森明子
 619 かりがねや遠嶺の紺の深まれり 静岡吉野美智子
 621 遠筑波蓮田の白の目にあふれ 佐倉内海保子
 641 白日傘の細きあぎとや歌碑じつと 栃木上岡佳子
 663 茄子の馬夫乗せ来よと足長く 静岡海野みち子

【特選句】

- 273 溝蕎麦や蛇口の固き水飲場 静岡萩野加壽子
 溝蕎麦は多く水辺や湿地など自生、淡紅、白など細かい花を咲かせる。あまり目立たぬ花だが可憐。

園丁が漏水を防ぐ為に、しつかり蛇口を閉めておいたのだろう。「蛇口の固き」に物語がある。

- 333 蓮池に舟のかくるる道いくつ 佐野芝宮留美子
 大きな蓮池に見える。蓮の花時は管理人の舟は忙しい。池の中には細い水路が縦横に走っていて、舟はそこに分け行つて蓮の手入れに余念が無い。人の丈ほどの蓮が密集しているので舟は目につかない。

- 628 木の裏へ蟬の移れる残暑かな 静岡曾根満
 残暑の厳しい頃となった。秋蟬も日陰を選んでいるのだろう。今までは鳴く蟬ばかりに気をとられていたが、蟬が横に動いて身を処しているのを発見した。再び蟬は鳴き始めたことだろう。

江見悦子主宰選

- 6 西方に日の濃く澁む原爆忌 さいな 山本右近
 35 日の重み落として日傘たたみけり 東京 藤田裕子
 45 富士塚の岩はジュラ紀か大蜥蜴 東京 下嶽孝一
 61 萱の野に埋れアイヌの木の墓標 札幌 松原智津子
 66 跡継ぎのなき墓倒す日の盛 徳島 福島吉美
 82 竹林の風を拾ひて夏の蝶 徳島 村上和義
 124 登山靴石ころ噛んで戻りくる 伊勢原 佐藤和子
 149 夜濯の野良着を踏むや外流し 横浜 山崎郁子
 170 辣蕪演け一人の時間使ひ切る 静岡 藤本節子
 327 御巢鷹山の岩根こごしや蟻の道 町田 広瀬俊雄
 332 紅蓮の莖しなやかに舟避けて 佐野 芝宮留美子
 337 板の間に踵張りつく朝曇 横浜 榎本文代
 349 吹かれるし草草に名や敗戦忌 町田 吉中愛子
 399 父母の墓砂丘に灼けて在すらむ 横浜 小林愛子
 428 筑波嶺を抱きてゆるがぬ雲の峰 益子 光岡れい子
 441 荒草の石塊つかむ羽拔軍鶏 那覇 前田貴美子
 457 金魚にもある溜息か水泡浮く 船橋 宮本加津代
 486 薄明をわんさと掠鳥の渡りかな 佐野 茂木弘子
 499 宝箱海酸漿の乾びたり 東京 加賀葉子
 528 月天心生絹の雲の一かけら 佐倉 大内佐奈枝
 532 みはるかす向日葵の黄よ青き空 流山 沢辺たけし

- 558 橋をゆく下駄の急かるる祭笛 日野 喜多尾明子
 561 ゴツゴツと乾くジーンズ秋暑し 東京 桑原優美子
 578 歳月を幹のねぢれに石榴咲く 流山 沢辺たけし
 588 撒水栓外れ跳び出す守宮の子 四街道 奥 太雅
 633 乱世の向日葵迷路出口なし 佐倉 内海良太
 645 畳まれし脚立を掴む蟬の殻 静岡 石川裕子

【特選句】

- 194 包丁を銜へ厨の大西瓜 徳島 宮西修一
 台所にでんと据えられた大西瓜、覚悟して庖丁の刃を入れ
 パキッと割れたまでは良いが、途中で止まってしまいにち
 もさっちもいかなかった。そんな情景を西瓜を擬人化して
 詠んだ。俳諧味溢れる作品となった。

- 247 底紅や母に記憶のひと欠片 静岡 藤本節子
 「底紅」とは「木槿」の別名。花の芯の部分が紅色である
 ことからついた。記憶も薄れがちな母だが、時折あざやかに
 思い出して話し始める瞬間がある。胸の底にしまっていた思
 い出なのか。母に対する哀切な愛情を詠んだ。

- 637 敗戦忌いま標的の島となり 那覇 大湾宗弘

戦後77年が経ち豊かで平和な時代を築き上げた日本。が今
 やウクライナへのロシア侵攻をきっかけに、力による示威
 行動が顕著になった。日本を取り巻く情勢も例外ではない。
 「標的の島」とずばりと表現した社会性豊かな句。

小林愛子 選

- 6 西方に日の濃く潑む原爆忌 さいなま 山本右近
 35 日の重み落として日傘たたみけり 東京 藤田裕子
 82 竹林の風を拾ひて夏の蝶 徳島 村上和義
 107 知床の海に落下の滝涼し 札幌 落合裕子
 112 息入れて紙風船の生き返る 富士 神田美穂子
 128 上布着て武士の娘と言ひし人 札幌 岡本敬子
 129 モノクロのローマの休日観て涼し 七尾 谷渡末枝
 149 夜濯の野良着を踏むや外流し 横浜 山崎郁子
 196 落鮎に水たつぷりと吉野川 徳島 宮西修一
 205 紙魚払ふ明治の父の備忘録 佐野 島田和枝
 247 底紅や母に記憶のひと欠片 静岡 藤本節子
 261 はへとりぐも掃除機の塵這ひ出せり 東京 江見悦子
 335 日の中を雨降る祭囃子かな 千葉 田中道江
 339 かなかなや遠山一つつ昏る 横浜 榎本文代
 349 吹かれるし草草に名や敗戦忌 町田 吉中愛子
 369 桑の実に昏染めし昭和の子 佐野 黒川しげ子
 383 じやんがらの鉦の音遠く父母遠く 横浜 坂本具子
 388 蛇口から湯のほとばしる原爆忌 志木 中村千久
 401 朝一を白波立てて蓮見船 佐野 増田幸子
 425 浅草に打水清し寄せ太鼓 横浜 三木豊子
 501 存分に熱砂蹴散らし逆上り 金沢 河野尚子

- 531 みんなの声にふくらむ榊大樹 流山 沢辺たけし
 550 バリバリと拡ぐからかさ秋暑し 東京 草間三香子
 558 橋をゆく下駄の急かるる祭笛 日野 喜多尾明子
 562 新涼や身に馴染みたる古バジャマ 東京 桑原優美子
 601 マスカット銘銘皿に在る和み 東京 長谷川信也
 638 八月や水漬く屍と君が代と 那覇 大湾宗弘

【特選句】

- 167 夕焼けて余生いよいよ老い盛り 西原 宮城 勉
 人生百年を標榜するようになり「いよいよ老い盛り」と意気込んでいる。時間とお金はたつぷりある。例え後期高齢者になっても夢はみられる。天の夕焼に包まれて心安らかではあるが、ふと一抹の悲哀がよぎる。

- 272 指先にマツチの匂ひ月の雨 静岡 萩野加壽子
 仲秋の名月が雨のために全く見えない。それでも雨が上がるのではないかと、ほの明るい辺りの空を見上げたりしている。「指先にマツチの匂ひ」とは灯を入れたのであろうか。残り香が趣を深めている。

- 419 土砂降りの冠水に浮く林檎かな 金沢 河野尚子

冠水とは、洪水などのために田畑や作物などが水をかぶること。昨今の異常な集中豪雨のため、様々な被害状況を見聞きすることが多い。「冠水に浮く」林檎をみて農家の嘆きは如何ばかりかと察せられる。

中村千久選

- 25 七歳の子の平和の詩沖繩忌 静岡 岩崎武士
 35 日の重み落して日傘たたみけり 東京 藤田裕子
 61 萱の野に埋れアイヌの木の墓標 札幌 松原智津子
 85 地平線までじやがたらの花盛り 苫小牧 林 陽子
 149 夜濯の野良着を踏むや外流し 横浜 山崎郁子
 247 底紅や母に記憶のひと欠片 静岡 藤本節子
 274 名を変へて形を変へて秋の雲 静岡 萩野加壽子
 400 爪を切る指の冷たき夕野分 横浜 小林愛子
 452 廃屋の薔薇の奔放限りなし 武蔵野 砂地宏子
 457 金魚にもある溜息か水泡浮く 船橋 宮本加津代
 474 産み月の腹の尖りや更衣 静岡 藤原千代子
 513 桔梗を馴染み床屋へ手土産に 大阪 入山繁幸
 523 月見して掛け忘れたる窓の鍵 立川 疋田華子
 635 鳳仙花母へむかしのかぞへ唄 那覇 大湾宗弘
 特 349 吹かれぬし草草に名や敗戦忌 町田 吉中愛子
- 評 生物学者でもあった昭和天皇は「雑草という名の草はない」という言葉を残している。戦争の犠牲になった民草、兵にも民間人にも、一人一人にそれぞれの名前があったのである。「敗戦忌」、夏の日差しの中で風に吹かれる野の草に寄せ、作者の思いの深さを感じさせる一句。

福島せいぎ選

- 58 水切りの小石投げゐる夏帽子 東京 下嶽孝一
 67 国葬と決まりし日なり鰯焼く 徳島 福島吉美
 81 梅花藻の清水にゆらぎ星座めく 徳島 村上和義
 85 地平線までじやがたらの花盛り 苫小牧 林 陽子
 321 木々の影砂場に刺さる晩夏光 佐野 加藤季代
 339 かなかなや遠山一つづつ昏る 横浜 榎本文代
 405 その先に海の見えたる茅の輪かな 福岡 宮田千恵子
 469 四阿へよく風通り蓮の花 新潟 高野松風
 564 敗戦日父の太字の万年筆 静岡 吉野美智子
 579 利根川の空の広さや崩れ築 船橋 久保村淑子
 603 避暑の湖いかだに犬を乗せにけり 静岡 渡辺寿恵
 615 星涼しさはさはさはと笹の音 栃木 上岡佳子
 622 ハンカチに玉虫包み持ち帰る 佐倉 内海保子
 670 早星地上に戦火果てしなき 内海 塩井志津
 特 23 海開き大海原を破ひけり 静岡 岩崎武士
- 評 海開きの神事は海辺で行われる。関係者が集まって神官による祓いのあと祝詞が奉上される。海水浴場の安全を祈願するのだが、関係者は皆神妙な面持ちでこうべを垂れる。見渡す限りの大海原を破ったとの捉え方が人々の神妙さと対比して、なんとなくおもしろい。

曾根 満選

- 35 日の重み落として日傘たたみけり 東京 藤田裕子
 61 萱の野に埋れアイヌの木の墓標 札幌 松原智津子
 79 純子師を呼べど青嶺に銜なし 金沢 伊藤美音子
 124 登山靴石ころ噛んで戻りくる 伊勢原 佐藤和子
 165 海の子の青き地球を背に泳ぐ 西原 宮城 勉
 184 桑の実や紫紺の残る爪の先 静岡 本多ひとみ
 196 落鮎に水たつぷりと吉野川 徳島 宮西修一
 226 蟻と蟻耳打ちをして別れたり 静岡 大村峰子
 243 隧道の薄暗がりを雪女郎 静岡 大長文昭
 366 地に伏して夏越の祓受く嫗 静岡 岡長島 操
 457 金魚にもある溜息か水泡浮く 船橋 宮本加津代
 618 もう一つ夏の月かな 療 栃木 上岡佳子
 635 鳳仙花母へむかしのかぞへ唄 那 覇 大湾宗弘
 670 旱星地上に戦火果てしなき 内 灘 塩井志津
 特 339 かなかなや遠山一つつつ昏る 横浜 榎本文代
 評 「遠山一つつつ昏る」は、実景描写。誰でもが見る夕
 景。ありのままを表現した簡明さが「詩情」を生み出した。
 それを季語の「かなかな」が支えています。句を音声化して
 います。「昏るる」の進行形にリズムを加えています。その
 リズミカルな句に感動です。

松原智津子選

- 23 海開き大海原を祓ひけり 静岡 岩崎武士
 25 七歳の子の平和の詩沖繩忌 静岡 岩崎武士
 46 打楽器のごとく鳴る絵馬青嵐 東京 下嶽孝一
 85 地平線までじやがたらの花盛り 苫小牧 林 陽子
 109 五人の名告げ五本の灯師の墓参 金沢 道場啓子
 112 息入れて紙風船の生き返る 富士 神田美穂子
 130 鎌倉や日傘を杖に石の階 七尾 谷渡末枝
 199 職終へて朝顔数ふ日課なり 敦賀 倉谷紫龍
 247 底紅や母に記憶のひと欠片 静岡 藤本節子
 254 お試しの補聴器初蟬捉へけり 横浜 大駒泰子
 457 金魚にもある溜息か水泡浮く 船橋 宮本加津代
 474 産み月の腹の尖りや更衣 静岡 藤原千代子
 509 夕さりの風に押されて魂送り 佐野 増田幸子
 534 逃水や牧草地行く一本道 横浜 豊 美佐子
 特 211 消しゴムで消せぬことあり原爆忌 佐々 鈴木美根子
 評 毎年の原爆忌を日本人はどの様な感慨で過して来たか。
 戦後77年、今だに核の恐怖にさらされている世界。「消しゴ
 ムで消されない」事実を心に刻んでいる作者。「風」の伝統、
 社会性俳句に秘められた日本人の俳心を共感をもつて評価し
 たいと思った。

亀田やす子選

25 七歳の子の平和の詩沖繩忌 静岡 岩崎武士
 30 渾身のシヨパンの響き冬北斗 敦賀 川口和代
 60 ライプ待つ野外ステージ河鹿鳴く 佐野 売野 緑
 88 海霧の中湖へ漕ぎ出す丸木舟 苫小牧 林 陽子
 90 青と黄の仕掛け花火や和平請ふ 横浜 小坂橋泰山
 132 向日葵や声を弾ませ鬼ごっこ 伊勢原 山本カツ子
 141 軸足は石狩の海虹立てり 札幌 紅露恵子
 214 岩礁に髪を乾かす鮑海女 七尾 谷渡末枝
 327 御巢鷹山の岩根ごしや蟻の道 町田 広瀬俊雄
 377 夏水仙一雨ありて林立す 横浜 加藤和子
 391 雑踏に托鉢僧の鈴 奈良 涼し 静岡 岡杉澤 修
 405 その先に海の見えたる茅の輪かな 福岡 宮田千恵子
 415 無言館の裸婦の眼差し秋に入る 佐倉 横川良子
 510 盆過の朝をしづかに雨の糸 佐野 増田幸子
 特 421 満行僧春へと一步踏み出せり 柏 内田郁代
 評 市川市にある法華経寺で、11月1日から2月10日まで修行僧による梵行の行事。日蓮宗の修法師になるために寒百日、一日七回水行と説誦行を行うという。満行を無事に迎えた修行僧を詠んだ句と思う。過酷な試練から開放され「春へと一步」の表現に喜びが滲み出ている。

沢辺たけし選

35 日の重み落として日傘たたみけり 東京 藤田裕子
 111 口も目もくわつと頬刺焼き上がる 富士 神田美穂子
 125 どう切れば甘さ均等大西瓜 札幌 岡本敬子
 165 海の子の青き地球を背に泳ぐ 西原 宮城 勉
 339 かなかなや遠山一つづつ昏る 横浜 榎本文代
 405 その先に海の見えたる茅の輪かな 福岡 宮田千恵子
 409 秋天や海には長き潮目あり 西海 山下敦子
 421 満行僧春へと一步踏み出せり 柏 内田郁代
 445 白雨去り庭石のごと亀ゐたる 佐野 増田幸子
 543 厨より水の香ほのか夜の秋 佐倉 新谷八郎
 585 短夜を更に短く明 鳥 四街道 奥 太雅
 608 子の帽子見え隠れする夏野かな 東京 山森明子
 619 かりがねや遠嶺の紺の深まれり 静岡 吉野美智子
 655 海原に落ちてくるやう銀河垂る 札幌 濱谷和代
 特 672 鯛起し土砂降りの雨引き連れて 内灘 塩井志津
 評 「鯛起し」とは鯛漁の始まる頃の雷、大漁の前兆ともいわれる。この句「土砂降りの雨引き連れて」で雷鳴と共に大粒の雨が海に跳ねあがる様がいふ浮かぶのだが、それが何故か、鯛の大群が飛沫を上げて水面を泳ぐ姿に重なってくるように思えた。これも季語の力か。

吉中愛子選

- 15 厚雲の伊吹嶺に切れ梅雨晴間 町田 桔梗 純
 61 萱の野に埋れアイヌの木の墓標 札 幌 松原智津子
 101 画布にまづ風のいろ置く白露かな さいな 山本 右近
 105 えぞ白蝶母なる一樹離れずに 札 幌 落合裕子
 125 どう切れば甘さ均等大西瓜 札 幌 岡本敬子
 165 海の子の青き地球を背に泳ぐ 西原 宮城 勉
 180 未央柳作業着低く干されたる 佐野 阿部 澄
 226 蟻と蟻耳打ちをして別れたり 静岡 大村 峰子
 326 秋来ぬと湖の色持つブルーベリー 横浜 小林 愛子
 338 札 状に 応 ふ 札 状 白 木 槿 横浜 榎本文代
 346 迎へられ見送られたる滝しぶき 東京 小池 清晴
 383 じやんがらの鉦の音遠く父母遠く 横浜 坂本具子
 599 沼風や蜻蛉の乗る遊び蔓 静岡 小川 明美
 629 井月と伊那の良夜を酌み交わし 敦賀 中川 雅月
 特 182 満ち満ちて星響き合ふ天の川 札 幌 松原智津子
- 評 智恵子は、東京には本当の空がない、と言っていたが今も東京では満天の星を見ることはない。故郷で見た夜空を思い出した。この句は〈満ち満ち〉と〈響き合ふ〉で出来ている。重語のようにも読めるが、天の川の全容を知るには必要か。感覚で捉えた若さを感じる。

榎本文代選

- 61 萱の野に埋れアイヌの木の墓標 札 幌 松原智津子
 65 乾拭きの框の艶や夏椿 徳島 福島 吉美
 66 跡継ぎのなき墓倒す日の盛り 徳島 福島 吉美
 106 星飛んでサンスベリアに初の花 札 幌 落合裕子
 205 紙魚払ふ明治の父の備忘録 佐野 島田 和枝
 264 爆心地くれなる深き月の暈 東京 江見悦子
 349 吹かれぬし草草に名や敗戦忌 町田 吉中 愛子
 357 帰る子に宿泊の子に盆の月 燕 渡辺 志ま
 400 爪を切る指のつめたき夕野分 横浜 小林 愛子
 431 切傷の血止めに塗りしまむし酒 松田 古谷悠紀子
 510 盆過の朝をしづかに雨の糸 佐野 増田 幸子
 529 不揃ひの刺子の布巾秋暑し 船橋 久保田淑子
 613 雄鶏の声のけだるき日の盛り 横浜 柳澤 宗正
 663 茄子の馬夫乗せ来よと足長く 静岡 海野みち子
 特 347 蛸や子の本棚に桶狭間 町田 吉中 愛子
- 評 蛸の声が聞こえると秋の気配が感じられる。夏休みも終わりに近づいた頃か、本棚に加わった一冊の歴史本。子の成長を感慨深く思ったのでしょうか。しかし戦さは多くの犠牲と悲しみを残してゆく。かなかなと澄んだひびきが心にしみる。

神田美穂子選

- 101 画布にまづ風のいろ置く白露かな さいな 山本右近
 139 潮錆びの蘆の騒立つ宵の月 さいな 山本右近
 182 満ち満ちて星響き合ふ天の川 札幌 松原智津子
 226 蟻と蟻耳打ちをして別れたり 静岡 大村峰子
 247 底紅や母に記憶のひと欠片 静岡 藤本節子
 274 名を変へて形を変へて秋の雲 静岡 萩野加壽子
 339 かなかなや遠山一つづつ昏る 横浜 榎本文代
 405 その先に海の見えたる茅の輪かな 福岡 宮田千恵子
 428 筑波嶺を抱きてゆるがぬ雲の峰 益子 光岡れい子
 433 花先に夜風の名残烏瓜 流山 穂苅照子
 458 水打つて顔に新たな風吹ける 船橋 宮本加津代
 509 夕さりの風に押されて魂送り 佐野 増田幸子
 627 千段を登りかなかなまだ遠し 静岡 曾根 満
 670 旱星地上に戦火果てしなき 内灘 塩井志津
 特35 日の重み落として日傘たたみけり 東京 藤田裕子
 評 炎天下を来た日傘に日差し重みが乗つていふと言ふ発想に妙に納得。日常生活に常にアンテナを張り、何気ないことから詩因を探り当てている。発想の豊かさを感じられた句。

井村和子選

- 23 海開き大海原を祓ひけり 静岡 岩崎武士
 35 日の重み落として日傘たたみけり 東京 藤田裕子
 84 ふる里の訛飛び交ふ芋煮会 徳島 村上和義
 101 画布にまづ風のいろ置く白露かな さいな 山本右近
 112 息入れて紙風船の生き返る 富士 神田美穂子
 126 お兄ちゃん茂りの奥の秘密基地 札幌 岡本敬子
 148 鮭漁の浜を棲み分く漁夫と熊 札幌 中鉢弘一
 192 数珠のごと雫連ねし蜘蛛の糸 札幌 中鉢弘一
 240 早苗田の水面に逆さ羊蹄山 札幌 中鉢弘一
 262 岩燕分水嶺の空切つて 東京 江見悦子
 312 つくつくし終章に入り転調す 静岡 杉澤 修
 381 秋冷や火攻めの窯の胴震ひ 金沢 豊田高子
 444 谷町の外科医へ通ふ浴衣掛け 白山 朝倉みゆき
 651 蜘蛛の子の八方へ散る命かな 静岡 加山ひさ子
 特281 翡翠や一閃のあと水の黙 静岡 杉澤 修
 評 翡翠は雀より少し大きくその名の通り背面は、ひすいの色を帯びた美しい鳥。溪流や池沼の辺の岩や木々の枝に止まって水面に浮き上がる魚を狙っている。その敏捷な飛翔を「一閃」と捉え、魚を咥え飛び立った水面を「水の黙」と把握、動と静を鮮やかに表現した絶妙な一句。

前田貴美子選

- 6 西方に日の濃く澱む原爆忌 さいな 山本右近
 35 日の重み落として日傘たたみけり 東京 藤田裕子
 38 日の匂ひ残れる茅の輪くぐりけり 東京 藤田裕子
 63 蟻地獄戦下の土の現るる 徳島 福島せいぎ
 101 画布にまづ風のいろ置く白露かな さいな 山本右近
 246 かなかなやお別れ会の残り酒 川崎 大久保進
 272 指先にマツチの匂ひ月の雨 静岡 萩野加壽子
 335 日の中を雨降る祭囃子かな 千葉 田中道江
 349 吹かれぬし草草に名や敗戦忌 町田 吉中愛子
 400 爪を切る指のつめたき夕野分 横浜 小林愛子
 422 恋の猫根岸の路地を縦横に 柏 内田郁代
 510 盆過の朝をしづかに雨の糸 佐野 増田幸子
 629 井月と伊那の良夜を酌み交わし 敦賀 中川雅月
 642 掛香や鹿の子絞りを縫ひ上げて 栃木 上岡佳子
 特 339 かなかなや遠山一つづつ昏る 横浜 榎本文代
 評 山国の日暮は早い。この句の眼目は、「遠山一つづつ昏る」。作者の立つ野は、里は、まだ秋の夕暮のやわらかな光の中にあるのだろう。昔観た谷内六郎の絵の風景を思い出した。野を渡る「かなかな」の声に、静かに暮れてゆく日本の風景だ。表記は「ひとつづつ」がいい。

岡本敬子選

- 23 海開き大海原を祓ひけり 静岡 岩崎武士
 35 日の重み落として日傘たたみけり 東京 藤田裕子
 52 緑青のすすむ大仏秋気澄む 敦賀 鶴田勝子
 101 画布にまづ風のいろ置く白露かな さいな 山本右近
 112 息入れて紙風船の生き返る 富士 神田美穂子
 165 海の子の青き地球を背に泳ぐ 西原 宮城勉
 226 蟻と蟻耳打ちをして別れたり 静岡 大村峰子
 272 指先にマツチの匂ひ月の雨 静岡 萩野加壽子
 339 かなかなや遠山一つづつ昏る 横浜 榎本文代
 439 つひと来てつとと走れり黄鵠鵠 南魚沼 森山暁湖
 452 廃屋の薔薇の奔放限りなし 武蔵野 砂地宏子
 484 墓洗ふお寺のそそけ束子借り 新潟 高橋ひろ
 528 月天心生絹の雲の一かけら 佐倉 大内佐奈枝
 590 原敬の墓碑の小さきよ天蓋花 柏 古川京子
 特 349 吹かれぬし草草に名や敗戦忌 町田 吉中愛子
 評 草原で草草が吹かれています。唯それだけである。その余白から私たちはもの想う。人民を草にたとえる「民草」という言葉。青人草。平穏な日常から狩り出されて戦った若きら家族。恋人たち。その一人一人に大切な名前があるのだと、「敗戦忌」の季語が主張する。

大木 茂選

- 14 風抜くる大暑の土間や日和下駄 東京久留島規子
 61 萱の野に埋れアイヌの木の墓標 札幌松原智津子
 97 野辺に咲く花ほほつきや瞽女の墓 敦賀鶴田勝子
 139 潮錆びの蘆の騒立つ宵の月 さいな山本右近
 146 修行者の運びし百合の根付く坊 金沢松田好子
 205 紙魚払ふ明治の父の備忘録 佐野島田和枝
 278 番外地の番屋の明かり鮭を待つ 札幌中鉢弘一
 285 高々と朴咲き塗師の年季明く 金沢豊田高子
 335 日の中を雨降る祭囃子かな 千葉田中道江
 431 切傷の血止めに塗りしまむし酒 松田古谷悠紀子
 443 長刀鉾誠の御稚児太刀振るふ 白山朝倉みゆき
 463 鬼籍簿を記す墨の香ほととぎす 金沢中條睦子
 474 産み月の腹の尖りや更衣 静岡藤原千代子
 515 本陣と云ふ空屋あり山毛榉若葉 新潟高橋ひろ
 特45 富士塚の岩はジュラ紀か大蜥蜴 東京下嶽孝一
 評 富士塚は、富士信仰に基づき、富士山に模し盛土や岩を
 組み合わせた人工の山や塚である。岩の径を注意深く辿つて
 いたところ、突然大蜥蜴に遭遇した。足元の岩は、約2億年
 前頃、この蜥蜴に繋がる爬虫類が跋扈していたジュラ紀のも
 のかと想像を巡らした。連想が効いている。

増田幸子選

- 14 風抜くる大暑の土間や日和下駄 東京久留島規子
 42 目の前の青田へ鳶の急降下 佐野芝宮留美子
 101 画布にまづ風のいろ置く白露かな さいな山本右近
 129 モノクロのローマの休日観て涼し 七尾谷渡末枝
 141 軸足は石狩の海虹立てり 札幌紅露恵子
 247 底紅や母に記憶のひと欠片 静岡藤本節子
 285 高々と朴咲き塗師の年季明く 金沢豊田高子
 312 つくつくし終章に入り転調す 静岡杉澤修
 321 木々の影砂場に刺さる晩夏光 佐野加藤季代
 412 秋の灯を分け合ひ夫と静かなる 西海山下敦子
 432 金太郎遊びし岩やただ灼くる 松田古谷悠紀子
 656 漁火の瞬き確か秋来る 札幌濱谷和代
 657 残る蚊の腕に止まる気配無し 佐野亀田やす子
 670 旱星地上に戦火果てしなき内灘塩井志津
 特158 朝涼や水の声聴き米を研ぐ 富士神田美穂子
 評 俳句は日々の暮らしの何気ない一齣を掬い上げればとい
 うが、至難のこととあきらめている。作者は朝の涼しさに水
 の声を聴き米を研ぐ。水とどんな会話を?こうして身辺りの
 自然・動植物に目を向け、心通わせている。この生き方こそ
 がと氣づかされた一句。

山本右近選

- 2 美しく毘網つくろふ女郎蜘蛛 西原宮城 勉
 45 富士塚の岩はジュラ紀か大蜥蜴 東京下嶽孝一
 61 萱の野に埋れアイヌの木の墓標 札幌松原智津子
 81 梅花藻の清水にゆらぎ星座めく 徳島村上和義
 97 野辺に咲く花ほほづきや替女の墓 敦賀鶴田勝子
 114 竹筒に紫紺一輪小間涼し 佐倉三屋英俊
 198 子規庵の狭庭に熟す木守柿 敦賀倉谷紫龍
 264 爆心地くれなる深き月の暈 東京江見悦子
 276 落し文防人の碑にのせて去る 船橋片桐帆一
 292 甚平の浪花なまりの男なる 志木中村千久
 294 連れ悪ろし二人揃ひて生身魂 鎌倉恒川清爾
 349 吹かれぬし草草に名や敗戦忌 町田吉中愛子
 397 夏落葉離宮にのこる鴨場跡 佐野加藤季代
 428 筑波嶺を抱きてゆるがぬ雲の峰 益子光岡れい子
 特 242 吉野山静やしづやと舞ふ螢 徳島山本瑤子
 評 源義経を偲んで静御前が詠んだ歌に「しづやしづしづのおだまき繰り返し昔を今になすよしもがな」「吉野山峰の白雪ふみわけて入にし人の跡を恋しき」がある。揚句はこの歌を基底に、明滅して舞う螢に静御前の想いを重ね合わせて拡がりのある素敵な句に仕上げている。

山本とく江選

- 85 地平線までじやがたらの花盛り 苫小牧林 陽子
 114 竹筒に紫紺一輪小間涼し 佐倉三屋英俊
 226 蟻と蟻耳打ちをして別れたり 静岡大村峰子
 237 夕闇を連れて初秋の鵜舟かな 大和中谷由郁
 242 吉野山静やしづやと舞ふ螢 徳島山本瑤子
 247 底紅や母に記憶のひと欠片 静岡藤本節子
 320 赤蜻蛉ついと来水と光合ふ 金沢豊田高子
 474 産み月の腹の尖りや更衣 静岡藤原千代子
 477 父祖迎ふ梵音のごとつくつくし 益子光岡れい子
 501 存分に熱砂蹴散らし逆上り 金沢河野尚子
 578 歳月を幹のねぢれに石榴咲く 流山沢辺たけし
 588 撒水栓外れ跳び出す守宮の子 四街道奥 太雅
 619 かりがねや遠嶺の紺の深まれり 静岡岡吉野美智子
 633 乱世の向日葵迷路出口なし 佐倉内海良太
 特 165 海の子の青き地球を背に泳ぐ 西原宮城 勉
 評 まず発想が大胆で若々しい。海の子は恐らく日焼けした元氣一杯の子供(達)でしょう。達者な泳ぎで時にはゆつたりと背泳ぎで波に浮かんでいる。
 着目は、海の青さを「青き地球」と捉えた写生・感覚で、斬新な句になったと感心した。

中條睦子選

- 85 地平線までじやがたらの花盛り 苦小牧林 陽子
 101 画布にまづ風のいろ置く白露かな さいな山 本右近
 176 屈む人台に乗る人袋掛 射水 成瀬真紀子
 237 夕闇を連れて初秋の鵜舟かな 大和 中谷由都
 276 落し文防人の碑にのせて去る 船橋 片桐帆一
 285 高々と朴咲き塗師の年季明く 金沢 豊田高子
 343 対岸に蝦夷富士置きて薯植うる 江別 佐藤 哲
 405 その先に海の見えたる茅の輪かな 福岡 宮田千恵子
 438 村中の田水沸く香や父の里 南魚沼 森山 暁湖
 458 水打つて顔に新たな風吹ける 船橋 宮本加津代
 493 白足袋の足並揃へ大神輿 横浜 三木 豊子
 501 存分に熱砂蹴散らし逆上り 金沢 河野尚子
 564 敗戦日父の太字の万年筆 静岡 吉野美智子
 622 ハンカチに玉虫包み持ち帰る 佐倉 内海保子
 特 342 遅刻子のポケットに鳴く蟬の声 江別 佐藤 哲
 評 遅刻して来た生徒と教師の姿が的確に表現されている。
 子供にとって自然に触れ、健やかに成長して行くことも大切。
 しかし命の大切さを教えるのも教育現場に立つ者の使命でもある。
 「ポケットに鳴く蟬の声」に先生の心の戸惑いも見え
 ストーリー性がある。

倉谷紫龍選

- 30 渾身のショパンの響き冬北斗 敦賀 川口和代
 97 野辺に咲く花ほほづきや替女の墓 敦賀 鶴田勝子
 130 鎌倉や日傘を杖に石の階 七尾 谷渡末枝
 202 ズッキーニのスープの清し涼新た 敦賀 倉谷ます美
 214 岩礁に髪を乾かす鮑海女 七尾 谷渡末枝
 257 新涼や木の橋にほふ綾子句碑 金沢 高田たみ子
 278 番外地の番屋の明かり鮭を待つ 札幌 中鉢弘一
 323 サングラス外して閻魔王拝す 佐野 加藤季代
 342 遅刻子のポケットに鳴く蟬の声 江別 佐藤 哲
 369 桑の実に唇染めし昭和の子 佐野 黒川しげ子
 425 浅草に打水清し寄せ太鼓 横浜 三木 豊子
 453 大樟や祭衣裳の男衆 武蔵野 砂地宏子
 613 雄鶏の声のけだるき日の盛り 横浜 柳澤宗正
 630 村芝居隣在所も挙り合ふ 敦賀 中川雅月
 特 52 緑青のすすむ大仏秋気澄む 敦賀 露田勝子
 評 緑青のすすむ大仏と詠まれています、奈良の大仏に次
 ぐ鎌倉大仏のことと思います。
 与謝野晶子が「美男におはす」と歌われたほどの魅力ある
 大きな阿弥陀様です。大きな体は、緑青に包まれ鎌倉の秋気
 を纏い、町を見守っていることでしょう。

倉谷ます美 選

- 29 炎昼や白球の飛ぶクレート 敦賀 川口和代
 61 萱の野に埋れアイヌの木の墓標 札幌 松原智津子
 66 跡継ぎのなき墓倒す日の盛り 徳島 福島吉美
 83 蟬の羽化覗く少女の眸の澄めり 徳島 村上和義
 98 のけぞりて泣く子に伏する祭獅子 敦賀 鶴田勝子
 199 職終へて朝顔数ふ日課なり 敦賀 倉谷紫龍
 312 つくつくし終章に入り転調す 静岡 杉澤 修
 342 遅刻子のポケットに鳴く蟬の声 江別 佐藤 哲
 395 初蟬と今日の日記に書き足せり 佐野 加藤季代
 405 その先に海の見えたる茅の輪かな 福岡 宮田千恵子
 420 盆踊太鼓打つ耳ピアス揺れ 金沢 河野尚子
 430 翔つ鷺の影黒々と青田かな 益子 光岡れい子
 610 武者の絵の顔の近づく佞武多かな 静岡 望月敏男
 630 村芝居隣在所も挙り合ふ 敦賀 中川雅月
 特 211 消しゴムで消せぬことあり原爆忌 佐々木 鈴木美根子
 評 原爆忌を毎年迎えております。日本は、過去に原爆を投下され、その光景は地獄の景でした。今また、世界を揺るがす化学兵器を使う構えの戦争が繰り返され、悲惨な爪跡を残そうとしています。句に作者は、消しゴムで消せない行為ですよと、厳しく訴えておられます。



令和四年 「万象」全国俳句大会 作品集

- 1 滴りの音の淨きに十息ほど 西原宮城 勉
- 2 美しく罌網つくるふ女郎蜘蛛
- 3 花の名を妻も言へずに水中花
- 4 点描の螢の金一つ落つ
- 5 打水の蕪村まどひし祇園路地 さいたま 山本右近
- 6 西方に日の濃く澱む原爆忌
- 7 カーテンの裏にうちやうちや子蟪蛄 柏 村田由美子
- 8 青時雨だんだん迫る拡声器
- 9 雨の家キシキシ喋る夏座敷
- 10 驟雨去り四方より人夫動き出す
- 11 青梅や整骨院の昼休み 東京 久留島規子
- 12 サイレンの遠ざかりけり真夜の百合
- 13 梅雨明や窓開け放ちモーツァルト
- 14 風抜くる大暑の土間や日和下駄
- 15 厚雲の伊吹嶺に切れ梅雨晴間 町田 桔梗 純
- 16 原爆の子の像梅雨の雲早し
- 17 緑蔭にポニーの少女背を伸ばし
- 18 白南風や砂浴ぶ雀そこここに
- 19 浜木綿の白の極まる日暮時 横浜 鈴木律子
- 20 金網を押して睡蓮咲きにけり

- 21 ポート漕ぐ男の腕の逞しや横浜 鈴木律子
22 御不動の庇を借りぬ大夕立
23 海開き大海原を祓ひけり静岡 岩崎武士
24 虫除けの七夕竹を畦に挿し
25 七歳の子の平和の詩沖繩忌
26 繕ひの母の背中や終戦日
27 母の日の届く似顔絵我に似て敦賀 川口和代
28 塗師の村卯の花腐し倦むほどに
29 炎昼や白球の飛ぶクレイコート
30 渾身のシヨパンの響き冬北斗
31 鈴のやうにかなかなしぐれ朝なく佐野 芝宮留美子
32 夕の風ゆたけし八重の梔子に
33 廟所跡のはや日蔭りぬ夏木立
34 義兼の入定の宮夏祓
35 日の重み落として日傘たたみけり東京 藤田裕子
36 かなかなや湯上りの髪拭きゐたる
37 摩天楼のガラスに夏の曙光かな
38 日の匂ひ残れる茅の輪くぐりけり
39 白樺の樹液のゼリー鳥の声佐野 亀田やす子
40 炎帝の汀に淡き稚魚の群

- 41 真青なる夏空さしば鳴きかはす佐野 芝宮留美子
42 目の前の青田へ鳶の急降下
43 ピアノ弾く夏風抜くる駅構内
44 かなかなや峡のいち日始まりぬ
45 富士塚の岩はジュラ紀か大蜥蜴東京 下嶽孝一
46 打楽器のごとく鳴る絵馬青嵐
47 遭難碑をやさしく撫づる萩の風
48 百面相の赤児囲みて庭花火
49 夏の月ほめき冷めゆく登り窯敦賀 鶴田勝子
50 祭獅子尾をからげたる異国の子
51 花蓮の一町埋むる朝かな
52 緑青のすすむ大仏秋気澄む
53 踊りなき広場の寂びぬ盆の月さいたま 山本右近
54 遠嶺の空薄れゆく夕芒
55 登り詰め昼顔のなほ宙探る東京 下嶽孝一
56 翡翠のダイブを待ちつ遠レンズ
57 手刀を切りつ座れり泥鰌鍋
58 水切りの小石投げゐる夏帽子
59 会津へと単車列なす半夏生佐野 売野 緑
60 ライプ待つ野外ステージ河鹿鳴く

- 61 萱の野に埋れアイヌの木の墓標 札幌松原智津子
 62 はたた神人心草木騒めかせ
 63 蟻地獄戦下の土の現る 徳島福島せいぎ
 64 鈴虫や堂百畳を開け放つ
 65 乾拭きの框の艶や夏椿 徳島福島吉美
 66 跡継ぎのなき墓倒す日の盛り
 67 国葬と決まりし日なり燬焼く
 68 路座仏を丸洗ひして夕立過ぐ
 69 楸邨忌国は戦争捨てられず 静岡曾根 満
 70 子鹿跳ぬ野に還りたる牧草地
 71 納涼船吊橋までを帰りけり
 72 駄菓子屋のをの子めの子の半ズボン
 73 文楽の人形操るや夏袴 東京中澤桃子
 74 小刻みに神輿飾りの揺れをりぬ
 75 ハラン葉の大蠟螂の動かざる
 76 白き椅子並ぶ庭先避暑の宿
 77 蟬鳴くや石狩川下る櫂の音 江別太田佳美
 78 妣の紬ドレスに仕立て孟蘭盆会
 79 純子師を呼べど青嶺に旣なし 金沢伊藤美音子
 80 炎昼や一人と見えて二人なる

- 81 梅花藻の清水にゆらぎ星座めく 徳島村上和義
 82 竹林の風を拾ひて夏の蝶
 83 蟬の羽化覗く少女の眸の澄めり
 84 ふる里の訛飛び交ふ芋煮会
 85 地平線までじやがたらの花盛り 苫小牧林 陽子
 86 姦しき巢立ちの時や海猫の鳥
 87 あぢさゐの朝の太氣を含みつ
 88 海霧の中湖へ漕ぎ出す丸木舟
 89 川岸につかる石段花いばら 横浜小板橋泰山
 90 青と黄の仕掛け花火や和平請ふ
 91 空割りて大地貫くはたた神
 92 棟上げの親方若し処暑の雲
 93 秋薔薇やモネの厨の青タイル 所沢三好かほる
 94 あつあつのすいとんを食ぶ終戦日
 95 ほうたるの闇をつらぬく光かな
 96 たんねんに端溪硯洗ひをり
 97 野辺に咲く花ほづきや替女の墓 敦賀鶴田勝子
 98 のけぞりて泣く子に伏する祭獅子
 99 獲物食むかまきり体ゆらしをり
 100 手秤にはじかみくれし朝市女

101 画布にまづ風のいろ置く白露かな さいなま 山本右近
 102 実むらさき雨後の露ため蕪村の碑
 103 山車を曳くかけ声揃ふ結び仲間 金沢 松田好子
 104 役目終へ久し灯台葛の花
 105 えぞ白蝶母なる一樹離れずに 札幌 落合裕子
 106 星飛んでサンスベリアに初の花
 107 知床の海に落下の滝涼し
 108 銃声に振り向き様の罷の眼
 109 五人の名告げ五本の灯師の墓参 金沢 道場啓子
 110 初秋の夜更け耳搔く膝を立て
 111 口も目もくわつと頬刺焼き上がる 富士 神田美穂子
 112 息入れて紙風船の生き返る
 113 灼熱の風のほむらや原爆忌 佐倉 三屋英俊
 114 竹筒に紫紺一輪小間涼し
 115 古池に白花密か 札幌 中鉢弘一
 116 かたつむり太古のままの紅檜皮
 117 青葉梟の声にいつしか眠りけり 佐野 売野 緑
 118 十三湖の蜆汁の香土用入
 119 那須野ヶ原の雲海解けはじめたり
 120 食べるより摘む方が好き茗荷の子

121 春雲や父の土産の榮太樓 焼津 小梁洋子
 122 立葵浮世見下ろす垣根ごし
 123 犬の舌だらりとありく酷暑かな 伊勢原 佐藤和子
 124 登山靴石ころ嚙んで戻りくる
 125 どう切れば甘さ均等大西瓜 札幌 岡本敬子
 126 お兄ちやんと茂りの奥の秘密基地
 127 嗚呼と言ひをうと応ふる桜かな
 128 上布着て武士の娘と言ひし人
 129 モノクロのローマの休日観て涼し 七尾 谷渡末枝
 130 鎌倉や日傘を杖に石の階
 131 河骨を叩く雨粒風生る 伊勢原 山本カツ子
 132 向日葵や声を弾ませ鬼ごっこ
 133 山奥の青葉時雨に肩濡らす 静岡 田中秀幸
 134 曇天の花梔子に屈みたる
 135 霧晴れて立枯れ池はエメラルド 酒々井 竹澤竹里
 136 流星や星の透き間を縫ふ様に
 137 腹ばひに若芽摘みとる蓴舟 札幌 吉田克己
 138 鼻につけ雄鳥の真似立葵
 139 潮錆びの蘆の騒立つ宵の月 さいなま 山本右近
 140 蠟涙の白とむる嵩終戦忌

141 軸足は石狩の海虹立てり 札幌紅露恵子
 142 脱力の天牛の足飛行開始
 143 湯の街に美しき灯ともる青しぐれ 金沢伊藤美音子
 144 ひむかしに犬の遠吠え熱帯夜
 145 通り雨すぎて耀ふ夏木立 金沢松田好子
 146 修行者の運びし百合の根付く坊
 147 錆碇並ぶ渡船場夏の浜 札幌中鉢弘一
 148 鮭漁の浜を棲み分く漁夫と熊
 149 夜濯の野良着を踏むや外流し 横浜山崎郁子
 150 せせらぎに諸手浸せば河鹿笛
 151 上段の構へいつぱし子かまきり 佐倉三屋英俊
 152 今生をひた鳴く蟬や左千夫の忌
 153 園庭の点字の手すり緑さす 那珂川高山ひさ子
 154 瓢箪のトンネル青き風抜ける
 155 浜風や羽根の欠けたる黒揚羽 焼津小梁洋子
 156 秋風と改札抜くる無人駅
 157 リバティーの花柄の杖避暑夫人 富士神田美穂子
 158 朝涼や水の声聴き米を研ぐ
 159 頭上過ぐ椋鳥五十羽の羽音かな 伊勢原佐藤和子
 160 落石の音が音呼ぶ富士登山

161 海鳴りの雲を離さぬ尾花かな 横浜三宅芳枝
 162 冬帝や昭和平成生き抜きて
 163 盆の月ちぎれし雲の山吹色 札幌北浦詩子
 164 対岸に突き上ぐ雲や台風来
 165 海の子の青き地球を背に泳ぐ 西原宮城勉
 166 手庇に紺碧の沖草田男忌
 167 夕焼けて余生いよいよ老い盛り
 168 海 わたなか中の宴思ほゆ熱帯魚
 169 巫女溜り青田の風を招き入れ 静岡藤本節子
 170 辣蕪漬け一人の時間使ひ切る
 171 駒草や頂上へと皆足早に 金沢今越みち子
 172 テラスより羽化の啞蟬青空へ
 173 門庭に一際清か玉簾
 174 色とりどりのヤッケ彼方の雪溪に
 175 遠い目のやがてまどろむ夕端居 射水成瀬真紀子
 176 屈む人台に乗る人袋掛
 177 市通り人の途切れに水を打つ
 178 田植機の逆さ合掌揺らしけり
 179 カンバスは未だ真つ白や濃紫陽花 佐野阿部澄
 180 未央柳作業着低く干されたる

- 181 夕迫り砂洲はしらじら秋の風 札幌松原智津子
 182 満ち満ちて星響き合ふ天の川
 183 滴りを葉の一枚が受けてをり 静岡本多ひとみ
 184 桑の実や紫紺の残る爪の先
 185 炎帝やどかと空気の重さあり
 186 眼閉ぢ波音を聴く夜の秋
 187 炎昼の疎開地にきくラジオかな 東京島野ひさ
 188 今年又父の樹に來し法師蟬
 189 争ひの絶えぬ人類百日紅
 190 昼の虫鳴くだけ鳴いて闇の虫
 191 漁網干す老師の背や秋没日 札幌中鉢弘一
 192 数珠のごと零連ねし蜘蛛の糸
 193 ビル蔭に寄りて信号待つ極暑 徳島宮西修一
 194 包丁を銜へ厨の大西瓜
 195 湯宿の灯届かぬ丘や星月夜
 196 落鮎に水たつぷりと吉野川
 197 姉川の尾花を埋める戦火あと 敦賀倉谷紫龍
 198 子規庵の狭庭に熟す木守柿
 199 職終へて朝顔数ふ日課なり
 200 秋出水ふるさとのみこむ土石流

- 201 うなぎ屋にバイク十台ツーリング 敦賀倉谷ます美
 202 ズッキーニのスープの清し涼新た
 203 行く夏の草に埋もれし辻地蔵 佐野島田和枝
 204 ミント挿す厨の窓や風涼し
 205 紙魚払ふ明治の父の備忘録
 206 鴨居に置く焼印古りし登山杖
 207 空蟬やブロック塀にしがみ付き 横浜岡元枝
 208 ゆつくりと竹林に消ゆ黒揚羽
 209 緑蔭の神と語るや稚児の指 佐倉鈴木隆久
 210 蓮の花開く暁至高善
 211 消しゴムで消せぬことあり原爆忌 佐倉鈴木美根子
 212 ままごとはいつも子役や青鬼灯
 213 白萩やお七の寺に習字塾 七尾谷渡末枝
 214 岩礁に髪を乾かす鮑海女
 215 昆布乾す島の磯の香籠めて乾す 札幌岡本敬子
 216 町営のセスナ豆にほひとつとび
 217 一斗罐で唐黍を焼く飛行場
 218 秋風の撫でゆく山の碧血碑
 219 風すべる一枚板や先祖棚 船橋入河大
 220 滝音の森の深きをつらぬきぬ

221 さやけしや建仁寺垣真新し 横浜大橋雅子
222 風祭青銀杏の数多散り
223 ハンドルの失せし自転車草いきれ 船橋片桐帆一
224 翡翠や背の瑠璃見せむ向きを變へ
225 泥塗れなる空蟬の目の光る 静岡大村峰子
226 蟻と蟻耳打ちをして別れたり
227 新緑の匂ひをつけて犬戻る
228 夏雲や鳥影を指すベン在先
229 万緑をつなぐ吊橋多摩溪谷 所沢南雲秀子
230 夕焼の湖瑠璃色にさざ波す
231 パソコンもスマホも知らず蝸牛 鎌倉恒川清爾
232 炎天に柱の跡や古都の夢
233 結納に鼓打ちけり昼の月 横浜三宅芳枝
234 初島の海黒々と二日月
235 山寺の月のみ満つる深き夜 大和中谷由郁
236 月の輪に子ら泳ぎ寄る野天の湯
237 夕闇を連れて初秋の鵜舟かな
238 頬杖の夏の課題は上の空
239 秋山の熊除け用に陶の鈴 札幌中鉢弘一
240 早苗田の水面に逆さ羊蹄山

241 大花火形くづして散り紛ふ 徳島山本瑤子
242 吉野山静やしづやと舞ふ螢
243 隧道の薄暗がりを雪女郎 静岡大長文昭
244 十葉の葉にとどまれる通り雨
245 管取れて永遠の眠りに今朝の秋 川崎大久保進
246 かなかなやお別れ会の残り酒
247 底紅や母に記憶のひと欠片 静岡藤本節子
248 暁の弓射る音や秋に入る
249 地藏会の寿限無寿限無と数珠を繰る さいたま山本右近
250 鬼女出むと闇に昂ぶる月の能
251 老鶯の合の手画眉鳥務めけり 横浜大駒泰子
252 炎帝の人も車も払ひをり
253 旧姓で呼び合ひてをりかき氷
254 お試しの補聴器初蟬捉へけり
255 おかつばのモノクロ写真ソーダ水 金沢高田たみ子
256 球を追ふ球児りりしく夏旺ん
257 新涼や木の橋にほふ綾子句碑
258 仏壇へ庭の花挿す今朝の秋
259 夜は夜るの百日紅の香りかな 静岡曾根満
260 ひと匙の蜂蜜パンに猛暑耐ゆ

261 はへとりぐも掃除機の塵這ひ出せり 東京江見悦子
 262 岩燕分水嶺の空切つて
 263 黒米の粥こまやかに今朝の秋
 264 爆心地くれなる深き月の暈
 265 百日紅いつもの道の曲り角 徳島山本晴美
 266 北海道ポスト涼しき青き色
 267 配達の米に供へありなすび漬
 268 ハンカチーフ祝仏二枚贈らるる
 269 八月は心で献花平和式 横浜大橋雅子
 270 一斉に鳩翔つ空や秋立ちぬ
 271 類祭忌夜つびて虫の宴かな 静岡萩野加壽子
 272 指先にマツチの匂ひ月の雨
 273 溝蕎麦や蛇口の固き水飲場
 274 名を変へて形を変へて秋の雲
 275 不動尊益々黒く油照り 船橋片桐帆一
 276 落し文防人の碑にのせて去る
 277 祈る子の掌のやう合歡の花 札幌中鉢弘一
 278 番外地の番屋の明かり鮭を待つ
 279 トタン屋根の音に驚く木の実かな 静岡大長文昭
 280 秋茄子の天ぷら一丁あつつあつ

281 翡翠や一閃のあと水の黙 静岡杉澤修
 282 切り岸に雨を装ふ夏薊
 283 白壁に凌霄灯るをんな坂
 284 風鈴の迎ふ画廊の深底
 285 高々と朴咲き塗師の年季明く 金沢豊田高子
 286 山城ゆ扇開きに稲の波
 287 カヤツクの前に魚はね秋の海 横浜西本才子
 288 川縁や胡桃割りたる跡のあり
 289 うす紅の雲割つて出づ眉の月 静岡永田公香
 290 夏の夕沼に鷗の羽根洗ふ
 291 遠空のにはかに昏し夕立ちし 志木中村千久
 292 甚平の浪花なまりの男なる
 293 紀の古墳のやさしき小山はたた神 鎌倉恒川清爾
 294 連れ悪ろし二人揃ひて生身魂
 295 秋茜追分節にのり来る 所沢南雲秀子
 296 赤岳に夏雲沸きて子等の声
 297 万緑へ公報流る「熊出し」と 静岡大村峰子
 298 職退きし漢の廻す芋水車
 299 故里は山又山や秋澄める
 300 風を誉め空を誉めたり仲の秋

301 今も尚空に追ひたき鬼やんま 金沢石川純子
302 風鈴の気ままな風に連なれり
303 にぎにぎと四万六千日の寺
304 夕立や人の散りたる大通り
305 夏休み親父料理の腕が上がる 金沢廣田宏美
306 土用の丑鰻のかはり豇豆餅
307 精霊馬すこし反りある茄子胡瓜
308 草叢へ一步に飛蝗とびはねる
309 太りたる青虫この葉喰ひ荒らし 桑野佐藤嘉洋
310 葉緑素むさぼり喰ひし葉虫取る
311 花棕櫚のそよぐ彼方を貨物船 静岡杉澤 修
312 つくつくし終章に入り転調す
313 墳丘の樟の大樹に残る蟬
314 百幹の竹春空を埋め尽くし
315 西空は大夕焼そばへが通る 徳島山本瑤子
316 真夜中の夢か現か夏の地震
317 はじめての寝返り声援汗の親 横浜大橋雅子
318 秋気澄む朝の六時の寺の鐘
319 百幹の若竹あをき音を生む 金沢豊田高子
320 赤蜻蛉ついと来水と光合ふ

321 木々の影砂場に刺さる晚夏光 佐野加藤季代
322 一片の雲をみてゐる葱坊主
323 サン格拉斯外して閻魔王拝す
324 へら鮎の魚拓に生きて夏座敷
325 夫の忌の大夕焼に包まるる 横浜小林愛子
326 秋来ぬと湖の色持つブルーベリ
327 御巢鷹山の岩根ごしや蟻の道 町田広瀬俊雄
328 防衛庁の電波塔越え燕去ぬ
329 秋立つやホルン響ける二の丸跡 横浜西本才子
330 網振って蜻蛉追へり海の丘
331 朝日子に弾けんばかり紅蓮 佐野芝宮留美子
332 紅蓮の茎しなやかに舟避けて
333 蓮池に舟のかくるる道いくつ
334 開ききる蓮華に風のやさしかれ
335 日の中を雨降る祭囃子かな 千葉田中道江
336 休耕田は向日葵畑空磨く
337 板の間に踵張りつく朝曇 横浜榎本文代
338 礼状に応ふ礼状白木槿
339 かなかなや遠山一つつつ昏る
340 秋簾巻き上げ空の青さかな

341 熊彫りの刃先に飛べり昼花火 江別佐藤 哲
 342 遅刻子のポケットに鳴く蟬の声
 343 対岸に蝦夷富士置きて薯植うる
 344 ささ舟を揺らせてみたし天の川
 345 白桃の食べ頃探る指の腹 東京小池清晴
 346 迎へられ見送られたる滝しぶき
 347 鯛や子の本棚に桶狭間 町田吉中愛子
 348 白菊と花屋を出づるしじみ蝶
 349 吹かれるし草草に名や敗戦忌
 350 一人分の膳を片寄す今朝の秋
 351 立待や雲間光りし星つれて 白山鶴尾正江
 352 故郷や山河沁み沁み終戦忌
 353 庭園の色めき美しや添水の音
 354 白山路なびく尾花は波と見る
 355 節電やぶんく廻る扇風機 燕 渡辺志ま
 356 育てたる鉢持ち帰る夏休み
 357 帰る子に宿泊の子に盆の月
 358 こぼれたる種の朝顔大輪に
 359 和毛残る頭を振りどほし鳥の子 柏 内田郁代
 360 お不動の祇園会に買ふ陀羅尼助

361 戦争が身近立夏の雨音に 那覇前田貴美子
 362 五月閏檻の獣の胎動す
 363 秋燕や寝墓に眠る和蘭人 静岡永田公香
 364 夏霧や最北利尻廃校へ
 365 出立の御用茶籠へ初紅葉 静岡長島 操
 366 地に伏して夏越の祓受く嫗
 367 落成を祝ふ早天ほととぎす
 368 夕晴れや湖面に浮かぶ雲の峰
 369 桑の実に唇染めし昭和の子 佐野黒川しげ子
 370 蕎麦殻の枕に差せる月明り
 371 川風に争ふ燕引き近し 船橋赤堀洋子
 372 大向日葵乗つて遊べる雀どち
 373 涌き立つや翅やはらかき夏あかね
 374 大夕日左右の森は蟬時雨
 375 牛蛙今宵も鳴きぬ名取邸 横浜加藤和子
 376 半月の切り口ほやけ原爆忌
 377 夏水仙一雨ありて林立す
 378 迎火にコバルト色の蜻蛉来る
 379 直射日光避けて木蔭に揚羽蝶 佐倉杉田富美代
 380 新盆やお棚飾りを居間に据ゑ

381 秋冷や火攻めの窯の胴震ひ 金沢豊田高子
382 遠国おちの戦禍を逃れ鳥渡る
383 じやんがらの鉦の音遠く父母遠く 横浜坂本具子
384 藁草履履きし小さき子終戦日
385 百日紅の花房重きコロナの日
386 ひっそりと歌枕展秋暑し
387 夏料理運んで来る京言葉 志木中村千久
388 蛇口から湯のほとばしる原爆忌
389 山肌を撫で夏霧の昇りけり 静岡杉澤修
390 蘆茂る隠沼分かつ風の道
391 雑踏に托鉢僧の鈴涼し
392 千筋となりて湯滝の匂ひけり
393 夕さりの破風に寄り添ふ蛇の衣 白山朝倉みゆき
394 慌てたる柿宜駆け登り御来迎
395 初蟬と今日の日記に書き足せり 佐野加藤季代
396 深山湖より渡り来る風新茶汲む
397 夏落葉離宮にのこる鴨場跡
398 空蟬の爪の執念案内板
399 父母の墓砂丘に灼けて在すらむ 横浜小林愛子
400 爪を切る指のつめたき夕野分

401 朝一を白波立てて蓮見船 佐野増田幸子
402 蓮の葉の雫をこぼし舳先かな
403 二八蕎麦夏大根の辛さかな 福岡宮田千恵子
404 故里は昔と同じ青嶺風
405 その先に海の見えたる茅の輪かな
406 うつすらとたしかに流る天の川
407 鳥影の無き日の暮るる極暑かな 佐野茂木弘子
408 南瓜切る六十二キロの踵上げ
409 秋天や海には長き潮目あり 西海山下敦子
410 黒猫の最も美し今日の月
411 同年の友の通夜なり望の月
412 秋の灯を分け合ひ夫と静かなる
413 うたた寝の肩叩かるる望の月 東京名和政代
414 北大の演習農場薄荷咲く
415 無言館の裸婦の眼差し秋に入る 佐倉横川良子
416 廃業の工場の庭ピラカンサ
417 秋の野や縦横無尽に飛行雲
418 一時の静寂もありて蟬時雨
419 土砂降りの冠水に浮く林檎かな 金沢河野尚子
420 盆踊太鼓打つ耳ピアス揺れ

421 満行僧春へと一步踏み出せり 柏 内田郁代
 422 恋の猫根岸の路地を縦横に
 423 盆燈籠灯し仏間のみづいろに 横浜 三木豊子
 424 渡し舟万緑の中ためらはず
 425 浅草に打水清し寄せ太鼓
 426 はじかみや甘酢に漬けてうす紅に
 427 轆轤挽く手に一瞬の鬼やんま 益子 光岡れい子
 428 筑波嶺を抱きてゆるがぬ雲の峰
 429 沙羅の花通夜の香煙眼にしむる
 430 翔つ驚の影黒々と青田かな
 431 切傷の血止めに塗りしまむし酒 松田 古谷悠紀子
 432 金太郎遊びし岩やただ灼くる
 433 花先に夜風の名残烏瓜 流山 穂刈照子
 434 軽やかに雀の渡る蓮の葉
 435 指呼の間に満月澄めり師の遠忌 柏 山本とく江
 436 池に映ゆ雲より秋の来りけり
 437 赫々と昇る朝日や半夏生 南魚沼 森山暁湖
 438 村中の田水沸く香や父の里
 439 つひと来てつとと走れり黄鶴鶴
 440 河鹿笛昼も小暗き硯川

441 荒草の石塊つかむ羽拔軍鶏 那覇 前田貴美子
 442 女学生夏の名残りの雨に濡れ
 443 長刀鉾誠の御稚児太刀振るふ 白山 朝倉みゆき
 444 谷町の外科医へ通ふ浴衣掛け
 445 白雨去り庭石のごと亀ゐたる 佐野 増田幸子
 446 殻出でて殻を凌ぎて羽化の蟬
 447 雪溪や樹海を越ゆるロープウェー 佐野 仲山さよ子
 448 谷川岳の空へつぎつぎ赤とんぼ
 449 水口に足浸け憩ふ田草取 静岡 藤原千代子
 450 沢音にくびれ充分青瓢
 451 日溜りのお握り弁当春隣 武蔵野 砂地宏子
 452 廃屋の薔薇の奔放限りなし
 453 大樟や祭衣裳の男衆
 454 たどりたる夜店の灯りラビリンス
 455 雷鳴や一瞬にしてザアザ降り 船橋 宮本加津代
 456 原爆の地獄見し眼に夾竹桃
 457 金魚にもある溜息か水泡浮く
 458 水打つて顔に新たな風吹ける
 459 初蟬やいつものさくら古木より 長崎 丸本祥夫
 460 針止まる十一時二分長崎忌

461 歳時記にふえる付箋や今朝の秋 佐野黒川しげ子
462 高垣を越えて咲き垂る灸花
463 鬼籍簿を記す墨の香ほととぎす 金沢中條睦子
464 手術して三日手を借り髪洗ふ
465 菩提子を一拾ひて退院す
466 とをに亡き犬を抱きたる夏の夢
467 蓮池や追ひ遣られたる釣の人 新潟高野松風
468 竿先は水の中置き蓮の花
469 四阿へよく風通り蓮の花
470 風起り蓮のひとひら水尾引けり
471 百日紅靴を洗へる外流し 佐野木村君子
472 サッカーの夏の合宿受験生
473 羽拔鶏争ひごととはもうせぬと 静岡藤原千代子
474 産み月の腹の尖りや更衣
475 雨に濡れここぞここぞと青蜜柑 東京名和政代
476 店番の句会となれり冬瓜汁
477 父祖迎ふ梵音のごとつくつくし 益子光岡れい子
478 守宮這ふゆがむ玻璃戸や庄司邸
479 占ひは吉方なしやダリア咲く
480 雨ニモ負ケズ諳ずる子や雲の峰

481 土筆剝くちんぶんかんの経済紙 新潟高橋ひろ
482 桃削いで小さい子から順番に
483 失くすなと大粒栗を猫へ貸す
484 墓洗ふお寺のそそけ東子借り
485 行く夏のうすき夕焼毛野の山 佐野茂木弘子
486 薄明をわんさと掠鳥の渡りかな
487 ありを見ぬ縁の下にも蟻地獄 静岡高橋一夫
488 新涼やかもめの白の白きこと
489 高みに揺れ鬼火めきたる凌霄花 徳島平岡功
490 火焰土器真つ赤に燃ゆる鶏頭花
491 溪谷をきらめき躍り下り鮎
492 盆の月ぞめきの余韻闇の中
493 白足袋の足並揃へ大神輿 横浜三木豊子
494 九品仏暮色せまりて苔の花
495 老人子供図書館へ楽し避暑 東京大場八朗
496 都電荒川見送りは薔薇の花
497 ラインダンス国際通りの猿滑り
498 炎帝さん月が変ればお別れね
499 宝箱海酸漿の乾びたり 東京加賀葉子
500 向日葵の迷路呼び合ふ声空へ

501 存分に熱砂蹴散らし逆上り 金沢河野尚子
502 もう会はぬ人かと想ふ白木槿
503 引き潮の渚に蟹の湧き出づる 横浜柳澤宗正
504 ざんやんま千鳥ヶ淵をほしひまま
505 銃手入れ念入りにする夜長かな 静岡宮崎知恵美
506 供養塔に葛の花弁香り立つ
507 稲の花リフォーム中の友の家 佐野店網洋子
508 蒼天へ百日紅の赤揺れて
509 夕さりの風に押されて魂送り 佐野増田幸子
510 盆過の朝をしづかに雨の糸
511 青芒眼下に白き大都会 大阪入山繁幸
512 夏草や廃寺礎石のそこかしこ
513 桔梗を馴染み床屋へ手土産に
514 初めての校正終へて生ビール
515 本陣と云ふ空屋あり山毛榉若葉 新潟高橋ひろ
516 夕映の燕きらりと背を返す
517 いばむしり半身かまへて退かず
518 花素より椿の赤き実を愛す
519 老僧の声に憩へり秋彼岸 東京岡村純子
520 初採りの南瓜供へて義母の声

521 歳時記に季語を探せる夜長かな 立川正田華子
522 防人の通りし径や萩の花
523 月見して掛け忘れたる窓の鍵
524 七匹の愛犬迎ふ苧殻焚く
525 ノーモアヒロシマナガサキ秋の空 四街道塗木翠雲
526 烏瓜咲けり谷津田の川風に
527 連の飩杭翔ちし秋燕 佐倉大内佐奈枝
528 月天心生絹の雲の一かけら
529 不揃ひの刺子の布巾秋暑し 船橋久保田淑子
530 終戦日接続不能となるネット
531 みんなの声にふくらむ榊大樹 流山沢辺たけし
532 みはるかす向日葵の黄よ青き空
533 一輪の河津桜を仏前に 横浜豊美佐子
534 逃水や牧草地行く一本道
535 夏果てや松の林に風を見る 市川奥澤よし江
536 いつもので差しつ差されつ秋はじめ
537 わたつみの神威岬に星の橋 金沢井村和子
538 夕月夜泪優しき師の恋し
539 二曲城を指呼に尾越の鴨の声 小とけ
540 この奥に出生稻荷ぞ銀杏実に

541 来て見れば野山も空も秋めける 横浜柳澤宗正
 542 頼朝の配流の地とや青田風
 543 厨より水の香ほのか夜の秋 佐倉新谷八郎
 544 新涼やまだ残りゐし駄け心
 545 春光を一身に受け大樹立つ 東京本多 葵
 546 緑雨やみ雲間の泉に光満つ
 547 橙の後ろに沈む夕日かな
 548 オリオンの拳の上の銀の月
 549 雨戸開け一瞬の風今朝の秋 東京草間三香子
 550 バリバリと拡ぐからかさ秋暑し
 551 房の如吹かれてをりぬ蟬の殻
 552 延命の枝を張る楠や涼新た
 553 落蟬の翅にじいろにあへぎをり 柏 古川京子
 554 原爆も拳骨も知らず西瓜食ふ
 555 弘法寺の逝くを弔ふ油蟬 船橋中嶋久登
 556 米の出来占ふひびの鏡餅
 557 洗ひ残しのグラスが二つ星涼し 日野喜多尾明子
 558 橋をゆく下駄の急かるる祭笛
 559 揚花火仄かに消ゆる遠岬
 560 秋蚊打つ老いたる手こそかなしけれ

561 ゴツゴツと乾くジーンズ秋暑し 東京桑原優美子
 562 新涼や身に馴染みたる古バジャマ
 563 茶畑の真青な波へ葬の列 静岡吉野美智子
 564 敗戦日父の太字の万年筆
 565 野ざらしの寺の大甕出水溜む 佐倉大内佐奈枝
 566 夏の雲霞が浦を一またぎ
 567 椰子蟹のモンローウオーク真砂路地 那覇中本 清
 568 藍染の着尺残布や秋燕
 569 醉芙蓉にきざす薄紅王妃門
 570 ドクターヘリ再開の島新北風来
 571 霧の間の見下ろす海の波平ら 静岡杉山紀美子
 572 寒明けや村を揺るがす鐘一打
 573 日向ほこ鳩足早にベンチ去る 横浜豊 美佐子
 574 観梅の道それぞれや喜寿の会
 575 その道はいつか来た道麦の秋 新潟佐藤幸示
 576 老鷲や義兄の魂昇る時
 577 嘴の餌を幾たびも巢へ芒種なる 流山沢辺たけし
 578 歳月を幹のねぢれに石榴咲く
 579 利根川の空の広さや崩れ築 船橋久保村淑子
 580 車窓にて楽譜読む人秋高し

581 白居易も見たくあるらん未央柳 佐倉新谷八郎
 582 南風吹くサッカー少年低く蹴る
 583 畦道に瑠璃色連ね螢草 横浜柳澤宗正
 584 草深き庭の隅より虫の声
 585 短夜を更に短く明烏 四街道奥 太雅
 586 電線に親族会議去ぬ燕
 587 帰省子に合はせ予約の美容院
 588 撒水栓外れ跳び出す守宮の子
 589 蕎麦に満ち不来方城の月仰ぐ 柏 古川京子
 590 原敬の墓碑の小さきよ天蓋花
 591 若僧や枝豆かごにバイク行く 東京岡村純子
 592 葉を刈りて一つ転がる赤南瓜
 593 盆の客潮引くやうに帰りたる 佐野阿部 澄
 594 デイサービス向日葵畑に囲まれて
 595 敗戦忌美爆音なら歓迎す 船橋山口秀吉
 596 「遺族の家」残る廃屋敗戦忌
 597 火吹竹キャンプばやりで復活す
 598 コロナ禍やマスクは季語を無くしたり
 599 沼風や蜻蛉の乗る遊び蔓 静岡小川明美
 600 今月の手帖の余白明日立秋

601 マスカット銘銘皿に在る和み 東京長谷川信也
 602 踊唄止むも手と足自ずから
 603 避暑の湖いかだに犬を乗せにけり 静岡渡辺寿恵
 604 秋麗ヘイと犬呼ぶ異人かな
 605 落蟬や飛ぶもかなはず鳴き続け 東京松井宣夫
 606 室外機裏道を占め熱帯夜
 607 千年を足利の藤つなぎたる 東京山森明子
 608 子の帽子見え隠れする夏野かな
 609 無言館出で鰯雲仰ぎたる 静岡望月敏男
 610 武者の絵の顔の近づく佞武多かな
 611 雲の峰富士愛鷹の向かふより 静岡杉山紀美子
 612 朝の日に眼下の町の終戦日
 613 雄鶏の声のけだるき日の盛り 横浜柳澤宗正
 614 海上を走る竜巻はたた神
 615 星涼しさはさはさはと笹の音 栃木上岡佳子
 616 湯上がりやコップ片手の門涼み
 617 兄弟のけんか治まる庭花火
 618 もう一つ夏の月かな漱
 619 かりがねや遠嶺の紺の深まれり 静岡吉野美智子
 620 退院のはづむ電話や山笑ふ

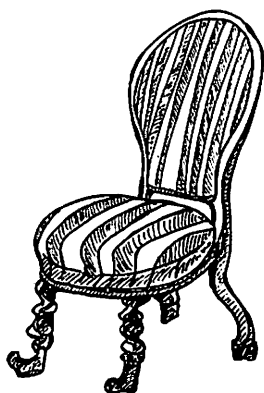
621 遠筑波蓮田の白の目にあふれ 佐倉内海保子
622 ハンカチに玉虫包み持ち帰る
623 救急車梅雨の闇より現るる 静岡加山ひさ子
624 十二月に入るやラジオの深夜便
625 柿青む雨上りの朝深呼吸 佐野関口かつ子
626 初ちちろ耳そばだてる勝手口
627 千段を登りかなかなまだ遠し 静岡曾根満
628 木の裏へ蟬の移れる残暑かな
629 井月と伊那の良夜を酌み交わし 敦賀中川雅月
630 村芝居隣在所も挙り合ふ
631 戦より七十七年走馬灯 佐倉内海良太
632 蓮池の明日咲く蒼百あまり
633 乱世の向日葵迷路出口なし
634 祇園会や疫病年年厄介に
635 鳳仙花母へむかしのかぞへ唄 那覇大湾宗弘
636 青藍の秋空に透く蝶の翅
637 敗戦忌いま標的の島となり
638 八月や水漬く屍と君が代と
639 早足の看護士防護服の汗 酒々井小林あけみ
640 水匂ふ草匂ふ里かなかなと

641 白日傘の細きあぎとや歌碑じつと 栃木上岡佳子
642 掛香や鹿の子絞りを縫ひ上げて
643 夏蝶の集合写真前よぎる 佐倉内海保子
644 螢火の高き樹の丈越え行けり
645 畳まれし脚立を摺む蟬の殻 静岡石川裕子
646 色褪せてうそぶく秋の金魚かな
647 原発の有刺鉄線虹立ちぬ 新潟齋藤信
648 花野行く亡き夫の背を追ふがごと
649 町なかで蜻蛉蜻蛉と言ひにけり 金沢北野陽子
650 蛸の窓に離れず一人居に
651 蜘蛛の子の八方へ散る命かな 静岡加山ひさ子
652 バゲット買ふ蒸風の角曲がり来て
653 味噌を付けおにぎり握る終戦日 栃木飯塚キミ
654 馬刺食ぶ会津の風の秋隣る
655 海原に落ちてくるやう銀河垂る 札幌濱谷和代
656 漁火の瞬き確か秋来る
657 残る蚊の腕に止まる気配無し 佐野亀田やす子
658 秋の日や開け放ちある書院の間
659 宥座の器試す子供や夏休み 佐野義本美智江
660 足利学校つくつく法師響きけり

- 661 盆道刈る蛭除けスプレー足に手に 静岡海野みち子
 662 苔取りの道具あれこれ墓洗ふ
 663 茄子の馬夫乗せ来よと足長く
 664 揚花火峡の夜空を一ぱいに
 665 ポストまで十分間の秋日傘 敦賀 為永香月枝
 666 叔母上寿露の命と成りたまふ
 667 広島にあなご飯待つ上がり端 栃木 飯塚キミ
 668 夏木立たちまち乾く水の文字
 669 ほろ酔に本音洩らせり今年酒内 灘塩井志津
 670 早星地上に戦火果てしなき
 671 筆太に初子の名前山笑ふ
 672 鯉起し土砂降りの雨引き連れて
 673 新涼や松の香残し男去る 札幌谷 廣司
 674 万緑や孫の産声電話ごし

※ 作品につきましては、漢字等の表記を「万象」誌の基準に
 則って修正した他は、応募作品をそのまま掲載致しました。

(編集部)



「大会作品集」制作担当支部よりの「挨拶

札幌 松原智津子

令和4年度の「万象」全国俳句大会が10月24日に開催予定となり「大会作品集」の制作を依頼されました。

初体験の難問に応える体制を整えたのは4月下旬。

本部との打ち合わせは、編集業務に詳しい北浦詩子さんが日程調整、業務管理を担当。今までお願いしていた「有文社」から印刷会社が変更されたこともあり、様式を変えるなどの紆余曲折を経ながら、対応しなければなりませんでした。投句先を落合裕子さんが引き受けて下さり、名簿作成、投句料の管理、投句原稿のパソコン入力者への連絡など、8月20日の投句締切り迄重責を担いました。

投句到着順に入力を進めながら、8月26日、漸く674句が集まり、翌日点検作業に入り、松原・落合・太田組、岡本・中鉢・北浦組、林・濱谷・谷組の三人ずつが、投句原稿とパソコンの打込み原稿の誤字脱字、表記の間違い訂正などを確認。判読不明の句については、作者に直接問い合わせるなど丁寧な対応を試みました。

「作品集」は「万象」11月号に掲載予定となりましたが、相互理解と有能な会員の協力で取り組むことができました。毎月の「万象」誌編集、校正のご苦勞を想像し、感謝の経験となりました。

←この線より切り取ってください

令和五年

万象作品

三 月 号

(十二月十五日締切)

都または市・町・村名	
姓 号	がなり
年齢	

(句の表記は歴史的かなづかいで) (*の枠内には何も書かないでください)

*

*

*

*

*

939-0364

射水市南太閤山 13
|
24

万象作品投句係行

84円切手を
貼ってください

〈通信欄〉

編集後記

▽3年ぶりに皆さんとお会いできるのを楽しみにしていた「全国俳句大会」が、感染急拡大で流れてしまったのはなんとも残念でした。けれども、そうした中でも、大会作品をたくさん投句していただき、北海道支部の皆さんのご尽力で作品集を完成することが出来ました。お世話をいただいた皆さんに厚く御礼申し上げます。

今回は本誌との合冊という形でお届け致しましたので、ゆっくりとお読み頂ければ幸いです。読書の秋、芸術の秋を楽しみましょう。

▽今年は7名の新同人が誕生しました。全国大会中止のため、誌面で自己紹介を掲載するのも3回目となりました。実際にお会いできる日を楽しみにしております。また、大会作品集をご担当いただいた北海道支部の皆さんに深く感謝申し上げます。

▽俳人協会のホームページを閲覧して、案内のあった「評論講座—俳句評

論が面白い」を視聴しました。西東三鬼等を題材に実作者と研究者が論を展開し、俳句評論の理解に役立つ内容でした。他に、井上弘美氏等を講師とする俳句講座の配信もあります。タイトルを見て、興味のある講座を見つけたら、視聴することをお薦めします。

▽「万象ノオト」を担当して一年余、原稿依頼の辞退が毎月のようにあり、あたふたとひと月が過ぎて行きます。ピンチヒッターを快く受けて下さり、一日で書いて下さった方もあり感謝、感謝。会員を中心に依頼しています。ご協力をお願いします。

▽俳句は座の文学、句会で互いの句について意見を出し合い、よりよい句にしていくな。それを改めて実感させてくれたのは、井上弘美著「俳句劇的添削術」(角川新書)でした。今年の読書週間は10月27日から11月9日。秋の夜長の一冊にいかがでしょうか。

会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

万象 十一月号

第二十一巻 第八号
通巻 第二四八号
令和四年十一月二日 発行

主宰 江見悦子
発行人 江見悦子
編集人 中村千久

〒168-0007 2
東京都杉並区高井戸東一-31-6 603

万象 発行所

〒336-3241 五七九六

万象 第二十一卷 第八号 (通卷二四八号)

平成十四年十一月十三日 第三種郵便物認可
令和四年十一月一日発行 (毎月一回一日発行)